

友の会だより 13号

都歴研友の会事務局 〒191-0033 東京都日野市百草971-158 増田方

電話・FAX 042-591-1853 ホームページ <http://rekishitomonokai/sakura.ne.jp/>

「友の会」2018年度秋季史跡見学会

佐原・香取への旅

報告 黒田 比佐雄

1818(文政元)年、伊能忠敬は江戸八丁堀の自宅で満73歳の生涯を終えた。したがって、2018年は忠敬没後200年にあたる。

忠敬は50歳で佐原から江戸深川黒江町に移り住み、本格的に天文・暦学等を学び、十次にわたる日本全国の沿海を巡る測量を敢行し「大日本沿海輿地全図」を創り上げた(完成は死後の文政4年)。その彼の資質を磨き、合理性や忍耐力を育んだ佐原という江戸期から明治期に商業町として栄えた地域はどんな所なのか？

また、東国の東の海辺の隅に、香取神宮、鹿島神宮というお社がなぜ存在するのか？

現在の佐原は「江戸優り」の「小江戸」として観光客のお目当てにもなっており、昔と今を織り交ぜながら巡ってみようというのが今回の史跡見学会であった。

2018年10月27日(土) JR成田線佐原駅南口に10:20までに、皆さんは三々五々集まり、挨拶もそこそこに、予約しておいたタクシー4台に分



主な内容

「友の会」史跡見学会(佐原・香取)	黒田比佐雄 1
佐原夢物語	小澤拓美 4
学習会と散策「国分寺跡を巡る」	増田克彦 6
ミニ歴史散策「たばこと塩の博物館」	多田統一 7
都歴研史跡見学「山梨」	佐藤徹 8
都歴研史跡見学「武蔵国」	松家直子 10
都歴研講演会(ダッタ・シャミ氏)	村木逸子 11
紀行 高句麗遺跡と後金史跡を巡る	増田克彦 15
史料紹介 安奉線の歴史	滝沢順 17
国際交流の中国旅行	豊田岩男 22
千住宿 まち歩き	矢島恒之 25
村から出征した「兵賦」と長州戦争	重政文三郎 29
会員著書紹介 21	会員の計報 31
友の会総会報告 31	議案第5号「友の会の今後」 32

乗して、まずは香取神宮へと向かった。参加者は16名。

○香取神宮

大鳥居の前で降り、10:30～約50分散策・見学。大鳥居をくぐると鬱蒼とした森の中に入り、この神域の森は杉、榎、黒松等の生育する自然林で県の天然記念物に指定されている。参道を左に入る。ちょっとした登りの山道、お社は小高い丘の上に鎮座した訳である。始めから登り坂とは、と思われた方がおられたかどうか？

上総一ノ宮として庶民の信仰の対象でもあった一つの証として凸型の「要石」に立ち寄った。これは鹿島神宮の凹型の方が知られているが、双方で対をなす。「要石」は神が降臨する磐座の信仰が原形であるが、地震を引き起こす鯰の頭と尾を抑え込む「要石」として庶民の信仰の対象になった。近くの水郷は昔から鯰が多く獲れ、ナマズ料理は有名である。

楼門から入り、拝殿で本殿に参拝する。これらの社殿はいずれも徳川綱吉の命により整えられたが、三間社流造の本殿と和様入母屋造りの楼門は



㊤香取神宮

㊦観福寺

国の重要文化財。その後、社務所脇の薄暗い宝物館を見学。ここには中国唐代の白銅鏡、国宝の「海獣葡萄鏡」がある（展示はレプリカ）。これは直径約30cm、地紋に葡萄唐草紋、摘みが狻猊（さんげい、玉を持つ唐獅子）、その周囲に獅子、馬、鹿、麒麟、孔雀、鳳凰や昆虫等がレリーフされている。正倉院には同様な銅鏡があり大和朝廷との関わりが想定される。香取神宮の主祭神は国譲りを進め、葦原中国を平定したという経津主大神であり、武神・軍神として祭ったと考えられる。現在の霞ヶ浦、水郷、印旛沼の地域は、古代は内海（香取海）を形成し、内陸部へ多くの入り江が入り込み、北西側から旧利根川水系や鬼怒川水系の河川が流入していた。大和政権はこの地形を蝦夷地征討のひとつの前進基地として活用し、軍隊・物資を投入する重要な拠点とした。大和政権は蝦夷征討、東国経営の進捗とともに、ここ香取・鹿島の高台に朝廷ゆかりの祭神を奉斎したものと考えられる。このような背景のなかで「海獣葡萄鏡」は大和朝廷を経て香取神宮に伝えられたのではなかろうか。今回は水郷まで足を延ばせなかったため、地形的な点からの確認はできなかった。



香取神宮の「要石」

○佐原の「観福寺」

香取神宮から次の観福寺へ、また、タクシーで向かう。11:30分～約40分見学。

観福寺は市街から南東少し離れた所にある。890（寛平2）年の開基という真言宗の古刹で、伊能家の菩提寺でもある。杉の木立に包まれて静な空気が漂っていた。最初に、前もって拝観をお願い



佐原の忠敬橋にて

いしていた「懸け仏」4体（地藏菩薩坐像・薬師如来坐像・十一面観音坐像・釈迦如来坐像）を見せて頂いた。案内した方の話では、元は香取神宮の神宮寺に安置されていたが、明治初年の神仏分離で廃寺になった時に打ち捨てられ、これを見た佐原の有意の方々がこの4体を観福寺に寄贈したという。現在は本堂とは別棟の蔵の中に安置されている。4体とも50cm程の円形の光背のなかに其々各仏像が備えられている。そのなかの十一面観音坐像と釈迦如来坐像の光背の裏に、元寇の折に戦勝祈願をして弘安五年に造仏した旨の銘が記されている。元寇に際して公家や寺社は祈禱、祈願する以外なす術はなかったであろうが、東国の香取神宮もその例外ではなかったようである。

寺の墓地は本堂の東側の高台に位置し、伊能家の墓所はそのほぼ中央、代々の当主やその家族の苔むした墓石が並び、他家の墓所と比べて広い敷地を占めている。忠敬の遺骨は江戸浅草の源空寺の、師である高橋至時の墓の側に埋葬されており、ここ観福寺には爪と遺髪が納められている。とはいえ、他の墓石と比べて立派に見える。また、忠敬が影響を受けた真淵門下の国学者伊能（楫取）魚彦（分家にあたる）の墓も案内してもらった。当寺には大きな枝垂桜があり四季折々の花も綺麗なところのようである。

○水郷佐原山車会館

やはりタクシーで次に向かったのが、「佐原囃子」で名の知れた「佐原の大祭」に繰り出す山車を展示している八坂神社境内の水郷佐原山車会館である。12:20～約40分見学。

事前下見で訪れた時、館の事務の方は大変喜ばれ、館長さんに解説をして頂きましょうと佐原の大祭への誇りのようなものを感じたが、当日も同様であった。まずは佐原囃子の流れる、佐原や祭りを紹介する映像を10分程見て凡その輪郭を掴んでから、館長さんの話を聞きながら見学。

展示のメインは、巧みな彫刻が施された4mの屋台の上に5mもの大人形が飾られている、9mもの豪快な山車（展示は2台）である。

佐原の大祭は300年にわたって続いており、7月の八坂神社祇園祭と10月の諏訪神社祭りの年2回行われる。夏は、街を東西に分ける小野川の東部の10の町屋が、秋は西部の15の町屋が担当し、其々の町屋は庶民に親しまれている武人（源義経等）や文人（菅原道真等）等の大人形を飾った山車を繰り出して、佐原の町を練り巡る。伊能忠敬も名主を務めていた時に祭りの中心的役割を果たし、諸難題に取り組んだようである。ユネスコの無形文化遺産に登録。

皆さん、想像以上の興味を持たれたようで、館長さんに次々に質問が浴びせて、予定時刻をオーバー。でも、佐原の町の蓄えられた力量を感じられたのではなかろうか。

○伊能忠敬記念館・伊能忠敬旧宅

観光客の目印となる忠敬橋付近は土曜日ということもあり、若い人達が多く訪れているのが印象的。遅い昼食を黒切り蕎麦、鰻などの店で済ませ、13:30分に伊能忠敬記念館に集合。

「記念館」には、図面は「大日本沿海輿地全図」の縮尺大図・中図・小図計 225 枚、(全図の原本は東京国立博物館蔵)、測量に使用した器具類などが所蔵されている(何れも国宝)。

学芸員の方の案内で、佐原時代の忠敬から 10 次に渡る測量踏査の展示を説明頂いた。忠敬が生きた宝暦～安永、天明・寛政(7年に江戸に出る)・文化・文政(元年没)の時代は日本独自の庶民文化が花開く一方で、幕府への批判や庶民の闘争が開始され、西欧の知識や技術の流布、欧米諸国の接近という日本の近代化の先駆けとなる時代、忠敬はその近代化に、粘り強さと合理的な工夫、身分や地域を超えた交流を貫き、大いなる貢献をした人物である。

その忠敬を育んだのは、利根川水系の舟運で経済的に繁栄した商業町佐原の前向きなエネルギーであったと今回強く感じ取ったところである。

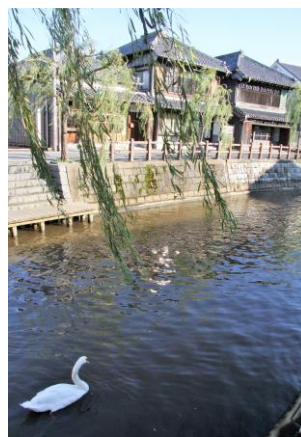
3.11 地震で傷んだ「旧宅」は修復され、静かに佇んでいた。

帰途は忠敬橋から駅まで徒歩で向かったが、途中の鰻の「山田屋」を横目で見ながら、麻生屋の雀焼き(実は小鯛)をお土産にする方々もおられ、15:30に駅前に集まり、増田会長のご挨拶をもって解散とした。

今回はタクシーを利用したが、佐原のタクシー会社は要領をよくわきまえており、スムーズに対応してもらい、大変助かりました。会計、写真撮影担当の方々はじめ、皆さんに大変お世話になりました。ありがとうございました。ゝ

佐原夢物語

軍神の街から文化の街へ



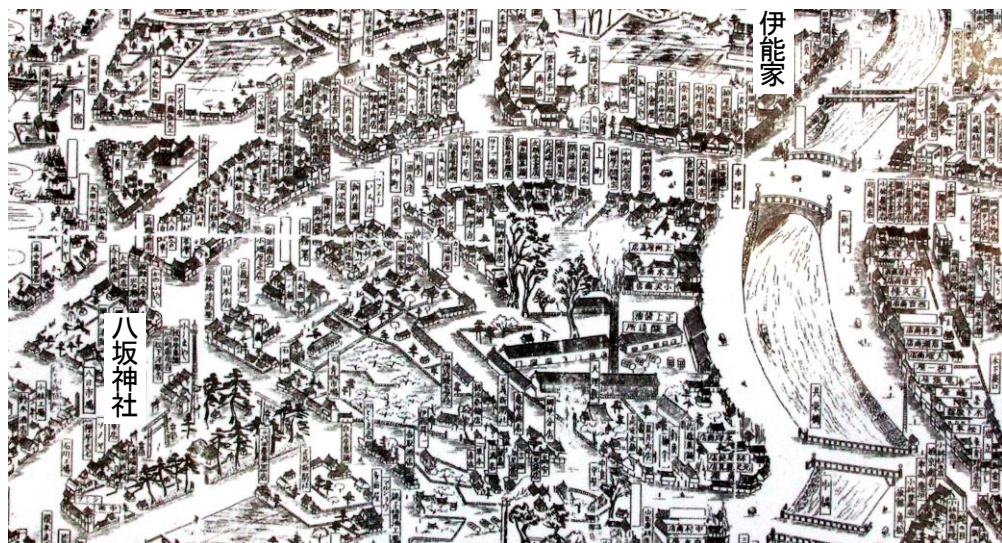
小澤拓美

昨 2018 年秋の都歴研友の会主催「佐原の旅」に参加しました。学生時代に何回か訪ねましたが、それからほぼ半世紀の間ご無沙汰でした。おかげさまで、佐原について改めて考える機会となりました。

佐原といえば、どうしても香取神宮に至る最後の宿場というイメージがありました。香取は、鹿嶋とならんで、古代日本の東北侵攻の前線基地のようなものです。勢力拡張を進めた大和政権軍が、香取・鹿嶋において神に祈りつつ軍紀を引き締め、東北の蝦夷制圧のために進撃していったのでしょう。その記憶は後世まで残り、近代の日本海軍でも「香取」は中心的な軍艦に命名された。大正時代の終わりに皇太子(のちの昭和天皇)が約 6 ヶ月をかけ、英仏を始めヨーロッパ表敬訪問の旅にでたときも、軍艦「香取」に乗っていったのである。さらに佐原には、町の東に香取神宮があるとともに、西の高台には諏訪神社がある。諏訪も軍神を祀ることで有名である。いやはやこれはかなわんと、学生時代の私は思っていた。

久しいあいだの思い込みであったが、今回の「佐原の旅」で大きく修正せざるをえなかった。今回の旅で一番の関心事は、2011 年の東日本大震災で受けた

打撃からどう立ち直っているか？だった。しかし、浦安周辺埋立地の液状化と同じように佐原が打撃をうけたのは何故か、7年前は深く考えてなかった。今回現地に行き、



佐原駅前の掲示「佐原町鳥瞰図」部分

「そうか、佐原の街も小野川が（古）利根川に流れ込むところで、土砂が堆積した軟弱地盤なのか」と理解した。旧利根川河川敷を含めた軟弱地盤の中に、小野川を人工的に蛇行させ、川岸に商家、その裏に醤油・味噌・酒の醸造工場を置いたのであろう。（現在の佐原駅周辺が、なんとなくだっぴろいのは、醸造工場やその出荷倉庫の跡地である）。近世の利根川付け替え工事によって、佐原は江戸という大消費地と船便によって直結されることになった。湧き水から遠い佐原中心地の生活水は、井戸か用水路に頼るしかない。だから、名主であった伊能家は、じゃあじゃあ橋の東（山寄り）、つまり配水の元締めの場所にあったのか、と納得した。この街は、香取への参詣路という横軸と、江戸との交易水路である小野川という縦軸の交点を核にしていたようであり、ここに伊能家は存在していたのであろう。

そして、近世での精神的紐帯の中心は、香取神宮ではなくて軟弱地盤の上に祭られた八坂神社（昔は御霊社といったらよう）となったのであろう。とすると、佐原は「小江戸」と称するのはおかしいのではないか。称するなら「小京都」あるいは「東の伏見」というべきか。ご存じのように伏見は運河・高瀬川と、大坂に下る淀川の交点にあり、交易と醸造によって栄えたのである。

このような商工業の発展こそが、伊能忠敬をはじめとして多くの文化人を輩出した背景にあるだろう。忠敬の手作業による（いや手足作業、というべきか）日本地図の作成・地球の大きさの測定

などは、個人だけの力によるものではない。九十九里浜に近い村に生まれた忠敬は養子として伊能家に入ったわけだが、この蔵には代々受け継がれてきた数学・天文学・測量学の書物が多くあったといわれる。名主として、また商家の主として活躍した忠敬は家業の傍らそれらを独学したようだ。これが中年以降の高橋至時（よしとき）への師事につながり、世界的というべき偉業を成し遂げるに至った。忠敬の周辺には、万葉集の研究家・楫取魚彦（かとりなひこ）や、儒学の研究家・久保木清淵（くぼきせいえん）らもいた。

江戸・東京には一つも山車（だし）を使う祭りが無い。一説には、幕府が治安上の理由で禁じたとのことである。山車を引き回す佐原祭りは、商工業者ら町人の心意気を示したのであろう。城がない街佐原は、近代では軍事工場や駐屯地もなかった。これが、九十九里からの上陸作戦を考えていたであろう米軍にとって、佐原を空襲する必要を認めなかった理由であろう。文化は強し、というところである。

今回の旅で、佐原についてのイメージは大きく変わり、地元のうなぎ屋・和菓子屋・お坊さん・資料館職員さんらといろいろお話できたことは幸せでありました。お世話くださいました黒田先生と、ご同行の皆様にご感謝申し上げます。

（お断り：書き連ねましたことは私見であり、史料的裏付けをとっているものではありません。）

学習会「全国の国分寺跡を巡る」と 武蔵国分寺跡の散策

講師 増田克彦氏

2019年4月16日火曜日、10時、JR国分寺駅改札口前集合。午前の部の学習会「全国の国分寺跡を巡る」は駅前徒歩2分に位置する都立殿ヶ谷戸庭園紅葉亭にて。入場料一般150円、65歳以上70円。150円払った者は何人いただろうか。参加者27名、内友の会々員11名。盛況である。

全国国分寺跡を巡り終えて

学習会の趣旨として、会員の増田克彦氏が昨年2月に上梓した『国分寺跡を巡る―色なき風に誘われて僧寺・尼寺全国137ヶ所の記憶―』の要旨紹介から始まった。

配布された資料は、国分寺跡関連がA3判1枚とA4判6枚、武蔵国分寺跡関連がA3判2枚、それにレジュメA4判1枚。回覧された国分寺跡のカラー写真A4判10枚。

氏の話は、全国国分寺配置地図を示しながらの「道」と「国」の説明からはじまった。古代の行政区は66ヶ国2嶋とするのが通例だが、時期を考えれば多禰国を入りたいとのことで、国分寺の設置は69ヶ所ではないかというのが氏の説。

続いて国分寺跡の事例紹介。

列島東西南北の端に位置する跡として、北は酒田市の出羽国分僧寺跡、東が館山市の安房国分僧

寺跡、西は対馬市の対馬嶋分僧寺跡、南が霧島市の大隅国分僧寺跡。

国指定特別史跡としては、石岡市の常陸国分僧寺跡、磐田市の遠江国分僧寺跡、高松市の讃岐国分僧寺跡の三ヶ所がある。

基壇だけでなく建物の復元がなされている例として、市原市の上総国分尼寺跡、国分寺市の武蔵国分僧寺・尼寺跡、前橋市の上野国分僧寺跡、豊川市の三河国分尼寺跡、七尾市の能登国分僧寺跡、姫路市の播磨国分僧寺跡、倉吉市の伯耆国分尼寺跡などをあげた。

塔礎石再利用の例として南国市の土佐国分僧寺跡がある。

ぜひ訪問して欲しいところとしては隠岐の島町の隠岐国分僧寺跡が紹介された。

引き続き、氏がなぜ国分寺跡巡りを思いついたかの話があり、最後に国分寺とは何か、何故設置されたかといった現段階での学会における研究成果が紹介され、二・三の質疑応答があって11時40分に会は閉じた。

そのまま紅葉亭に残って昼食を摂る者、殿ヶ谷戸庭園を散策する者、駅周辺での昼食に急ぐものにとりあえず別れた。

武蔵国分僧寺・尼寺跡を散策

午後の部の武蔵国分寺跡散策は13時30分、JR西国分寺駅改札前再集合。参加者20名内会員9名であった。

暑い程の陽射しの中、東山道武蔵路跡、都立多



講師・増田克彦氏



摩図書館、武蔵台遺跡・敷石住居跡、鎌倉街道、伝祥応寺跡・塚跡、武蔵国分尼寺跡、国分寺市文化財資料展示室、武蔵国分僧寺跡、現国分寺、武蔵国分寺資料館、お鷹の道・真姿の池湧水群、武蔵国分僧寺北方建物跡と歩き、16 時 40 分、J R 国分寺駅に到着解散。歩数は 13,000 歩程か。

この間要所々々で解説板を覗き、国分寺市文化財資料展示室では嘱託員氏から 30 分以上の解説を受け、さらに武蔵国分僧寺塔跡への最短距離を案内していただいた。

参加者に疲労の色が見え始めたため 30 段程の石段を登ることになる国分寺薬師堂は割愛。武蔵国分寺資料館を見学。聖武天皇の国分寺建立の詔の文言に驚き、白鳳仏の観音様を鑑賞。七重塔モニュメントの前で集合写真を撮り、そのあとはお鷹の道をたどって駅へ向かった。(M)



武蔵国分寺資料館にて

の世界」、3 階の常設展示「たばこの歴史と文化」を見て回った。鎮目学芸員は、最後まで我々見学者に同行し、見所について適切なアドバイスをしてくれた。「塩の世界」では、約 1.4 t のポーランド岩塩の実物、岩塩による聖キング像の再現彫刻、瀬戸内海の入浜のジオラマ模型、塩の結晶など、塩づくりの歴史や塩のサイエンスについて知ることができた。「たばこの歴史と文化」では、メキシコ・パレンケ遺跡のたばこを吸う神の再現レリーフ、世界の喫煙具、日本のたばこポスター、専売制度の歴史年表など、たばこ文化の形成と定着の様子を知ることができた。

たばこと塩は、酒と同様税収確保の上から大変重要な産業であるにもかかわらず、高校教育においてそれ程重きが置かれてこなかった。筆者は、徳島県出身である。小学生の頃、遠足で鳴門の塩田を訪れたことがある。また、実家が水田の前作としてたばこを栽培していた。夏の暑い時期に、コークスで 50 度にも暖められた乾燥室で作業を手伝ったこともある。今回は、特別な思いで展示品を見て回ることができた。

産業考古学の立場から見ると、葉たばこの生産から加工、そして販売に至るまでの産業連関を考慮した展示も必要であろう。特に、農業遺産や機械遺産の視点が求められる。また、博物館経営という観点から見ると、スカイツリーの観光客をどう呼び込むか、そして区内の企業博物館同士の連携を図ることにより、渋谷とは違った立地条件を生かした展開を期待したい。

ミニ歴史散策報告 たばこと塩の博物館

多田 統一

9 月 5 日 (水)、午後 2 時から午後 3 時半まで、墨田区にある「たばこと塩の博物館」を見学した。参加者は 8 名、その内都歴研友の会の会員は 4 名であった。当博物館は、墨田区にある 5 つの企業博物館、郵政博物館 (押上)、たばこと塩の博物館 (横川)、花王ミュージアム (文花)、東武博物館 (東向島)、セイコーミュージアム (東向島) の 1 つである。当博物館は、たばこと塩の歴史と文化を紹介することを目的に、日本専売公社 (現・日本たばこ産業株式会社) によって設立され、1978 年 11 月に渋谷の公園通りに開館した。現在地に移転したのは、2015 年 4 月のことである。

1 階ワークショップルームで学芸部の鎮目良文学芸員から説明を受けた後、2 階の常設展示「塩

山梨県の国宝と 甲斐源氏(武田氏)の足跡をたどる

佐藤 徹

退職後東京からやや遠隔の地に住むようになった身には、友の会から案内をいただいている都歴研の春と秋の史跡見学会は出かける良いきっかけを与えてくれる。

平成30年11月18日(日)の秋季見学会は、身近な地域だが私にはあまり知ることのなかった山梨県の史跡を25名の参加者(友の会からの参加は佐藤1名)で以下のコースで巡った。なお、講師は山梨県考古学協会名誉会長の田代孝さん。

大善寺と戊辰戦争の一コマ

笹子トンネルを抜けた国道20号沿いにひっそりと建つ大善寺は奈良時代に開創された古刹。本堂(薬師堂:国宝)、江戸時代に再建された壮大な山門の規模からかつての隆盛がうかがえる。寺の

近くで戊辰戦争の一コマである「柏尾坂の戦い」のあったことが、門前



上: 柏尾坂の戦いを描いた錦絵 下: 大善寺本堂

<午前>

J R八王子駅集合→大善寺(甲州市)→柏尾坂古戦場跡(車窓)→景德院(甲州市)→信玄堤関連史跡(石積出→白根将棋頭(南アルプス市)→信玄堤公園(甲斐市)) 昼食休憩(「ほうとう小作」双葉バイパス店)

<午後>

信玄堤公園→武田氏館跡(甲府市)→甲斐善光寺(甲府市)→恵林寺(甲州市)→雲峰寺(甲州市)→J R八王子駅解散

の錦絵の説明板から分かる。東征の東山道軍参謀乾退助が、先祖が武田信玄の重臣板垣信方に遡るという謂れをもとに東征中に板垣に復姓したエピソードなどは興味深かった。

大善寺から東に少し戻って景德院に向かう。織田・徳川連合軍に追われ新府城から東に逃れた武田勝頼一行が織田軍に敗れ自害した地に家康が命じて菩提追悼のため建てさせた寺。武田勝頼、北条夫人、武田信勝の自害を伝える生害石や墓がある。

信玄堤と関連史跡

次に向かったのは甲斐市竜王の信玄堤関連史跡。



景德院



上：石積出 下：聖牛

巨摩山地から東流する御勅使川は元は山地を出るとすぐに南に広がって流れていた。武田信玄は御勅使川の平地への出口付近に石積出や将棋頭などの水防施設を築き川の流路を北方に変え、釜無川との合流地点を高岩（竜王鼻）の岩壁にぶつかる付近にすることで水力を弱め、さらにその下流に堤を築いて氾濫を防ぐようにした。

中学校の歴史教科書にも記載されている有名な治水事業だが、面的な広がりのある見学箇所なので、個人では訪れにくい。地元講師の案内や車の使用で全体を見学する機会を得たことは幸いだった。

信玄堤に関する最古の文書は永禄3年(1560年)の武田信玄印判状（『保坂家文書』）とされる。同文書では「竜王の川除」（信玄堤）に居住した際に家ごとの棟別役が免除されることを記しており、堤防や用水路の維持管理に従事する住民を厚遇したことが分かる。

信玄堤公園でほうとうの昼食をいただいた後、甲府市内の躑躅ヶ崎館跡に向かう。

躑躅ヶ崎館跡を訪ねる

信玄の父武田信虎が居館として築いた所には曲

輪や堀の址だけで建物は残っていない。三橋美智也の武田節のとおり石垣もない。館跡を通り抜けると後背に、詰城の要害山城が築かれた要害山が見えた。ちょうど七五三の宮参りで館跡の一部にある武田神社は賑わっていたが、この神社も大正8年に創建された新しいものだという。

帰途に甲斐善光寺と甲州市の恵林寺に立ち寄る。川中島の戦いで信濃に侵攻した信玄が善光寺の本尊を遷して創建した寺である。講師の説明で江戸時代に再建された現本堂の建物は信濃善光寺と同規模とのことで、確かに巨大な堂宇である。ただ、信濃善光寺のように仲見世や宿坊が軒を連ねるような門前町は形成されていなかった。武田氏滅亡後、本尊は織田・徳川・豊臣氏を転々として、慶長3年秀吉が信濃に戻している。

本尊とともに信濃善光寺から移されたといわれる源頼朝像・源実朝像を宝物館で拝観した。

「心頭滅却火自涼」に肅然

甲州市の恵林寺は夢窓国師が開山し武田信玄が菩提寺と定めた古刹。武田氏を滅亡させた織田軍が敵対した佐々木一族をかくまったとの理由で恵林寺を囲んだとき、快川和尚ら百数十人の僧が三門に押し込められ焼殺されたことで有名。



上：館跡入口 下：甲斐善光寺



恵林寺三門

学生時代に観た木下恵介監督の映画「笛吹川」の三門炎上のシーンがとても印象的だったので、恵林寺はぜひ訪ねてみたかったところだ。快川の遺偈「心頭滅却火自涼」を掛けて建つ三門を薄暗くなった境内で拝観し、改めて肅然とした。

都歴研春季史跡見学会

武蔵国誕生の歴史を歩く

報告 松 家 直 子

日時 2019年3月17日(日) 9時府中駅集合
見学場所 ①府中宿高札場 ②大国魂神社 ③武蔵国府跡(国衙・国司館) ④御嶽塚古墳 ⑤武蔵府中熊野神社古墳 ⑥坪宮 ⑦府中市郷土の森博物館 **参加者** 33人

講師の小野一之さん(郷土の森博物館館長)のお話によれば、12年前にも都歴研の見学会の講師を勤められたそうで、武蔵国分寺跡から府中刑務所を経て郷土の森博物館迄歩いたことを思い出した。

まず江戸時代の高札場跡(この内側にくらやみ祭りの御旅所がある)を見学し、次いで鎌倉時代に武蔵国の6祭神を祀る六所宮として栄えた大国魂神社に戻った。この境内の東側で、奈良・平安時代の武蔵国府の中心の国衙の跡が発見されたのである。大型の瓦葺きの掘立柱建物が多数存在していたことがわかり、今は住宅地の一面が史跡公園になり、柱跡を見学した。また、神社の西側の府中本町駅との間の地で国司の館の跡も発掘され、

恵林寺から塩山市街を通り、いよいよ暗さが増す中を青梅街道を北上。大菩薩峠への道に入つてわずか行った所に裂石山雲峰寺があった。甲斐国の鬼門に位置するため代々の国主の祈願所の由緒を持つ寺である。自刃した勝頼の家臣が落ちのびて武田家の重宝(甲斐源氏ゆかりの日の丸の御旗、孫子の風林火山の旗など)を納めたと伝えられている。これらの寺宝を宝物庫で拝観させていただいた。

盛り沢山の見学先をバスを使って効率的に巡っても短日ゆえ帰途は真っ暗になった。ただ、信玄堤など野外のフィールドワークができた見学だったので充実感があつた。

模型とVR画像による復元が試みられていた。府中は、古代から現代まで人々が切れ目なく住み続けてきた町であることを実感した。40年間続けられてきた発掘調査(多くは市街地再開発に伴うもので、国司館跡もイトーヨーカ堂の建設予定地だった)の成果は、郷土の森博物館のブックレット17『よみがえる古代武蔵国府』で詳しく知ることができる。

昨年10月に東国史の会で訪れた下野国庁跡は、全域が発掘で画定され、前殿が復元されていたが、それは国府の衰退後に原野または農地になってしまったからこそ可能だったのである。ここの資料館で、復元工事の際に礎石の上に柱をぴったり合わせる映像を見てから復元建物を見ると、ただの柱が急に生き生きと見えてきたのだった。武蔵国府でももし建物の復元がなされるなら、古代がより身近に感じられるに違いない。ところで、下野国庁跡の北側にある宮目(みやめ)神社は国庁の正殿跡と推定されているが、大國魂神社の中にも、宮乃咩(みやのめ)神社という摂社があり、くら

やみ祭りで神職が特別に奉幣するそうである。午後に見学した坪宮も国造が祀られ神職が奉幣するそうで、こういう見過ごされそうな小さな社に古代からのつながりがあるのが興味深かった。

府中本町駅から南武線で西府駅に向かい、駅の南側にある御嶽塚五号墳に登ってみた。ここは長く、新田義貞の分倍河原合戦の戦死者を祀る塚あるいは御岳山信仰の塚と見られていた。そのため府中周辺には古墳が存在せず、したがって有力豪族がいない空白地だから国府の設置場所に選ばれたと考えられていた。(武蔵国北部に有力豪族がいたことを示すさきたま古墳群には、2017年11月に友の会の見学会で訪れ、国宝の鉄剣を見た)。現在では御嶽塚などは6～7世紀の群集墳と考えられ、それを決定づけたのが武蔵府中熊野神社古墳の発掘だった。全国にも5、6例しかない上円下方墳で、復元されたのが2005年だから、12年前の見学会の時は知られていなかったわけで、「今回の見学会の目玉はこの古墳です」と見学担当者の赤迫さんが話してくださった。墳丘を覆う丸い石がひかり輝いていて、この古墳の主のような有力首長に支えられて、武蔵国府が成立したのだろう。

発掘にあたった塚原さんに石室内にの副葬品がほとんど残っていなかったわけをうかがった。熊

野神社の裏手の小高い丘は神社の奥の院として甲州街道に行く旅人の参拝を集め、戦争中は防空壕になったりもした。農家の人が刀を持ち出してきて鎌として使っていたこともあったそうだ。明治時代に古墳の石室ではないかという記事が出たが顧みられなかった。発掘で出土したのは七曜文を刻んだ靱尻金具だけだが、もし刀が見つかったら正倉院級の国宝になったかもしれない。

靱尻金具を見た展示館には墳丘の断面図があり、版築と掘り込み地業という工法について書かれていたが、木村先生が両者の違いについて説明員をつかまえて繰り返し質問され、ロームと黒土を交互につき固める版築に対し掘り込み地業とは石室の下地盤の改良工事であることが判明した。こういうあくなき探求心があるから木村先生はいつまでも若々しいのだと感じた。分倍河原駅から芝間道を歩いて郷土の森博物館にたどり着くころには、すっかりくたびれてしまい、博物館の新しい展示方法(まつりの窓から歴史をのぞく)についての小野館長のお話を十分に聴けなかったのが残念である。

武蔵国府と熊野神社古墳の中間に東山道武蔵路が造られ、まっすぐ北上すると武蔵国分寺に至る。4月16日(火)に増田先生による『国分寺を巡る』お話し会が毘谷戸庭園で開かれた。

都歴研講演会

講師 ダッタ・シャミ氏

東京学芸大学教職大学院准教授
国際バカロレア教員養成プログラムディレクター

「世界史探求」をどう教えるか

村 木 逸 子

6月15日午後3時から都立杉並高校会議室で。

※※

ダッタ・ジャミ氏は自分の経験に触れながら自己の「教育哲学」について話をされた。

インドで生まれ、中学1年までインドの学校で学び、日本に来てからは東京世田谷にある「Saint Mary's International School」で学んだ。以前は

物理学を学ぶつもりであったが、高校で得たある授業体験から「日本史」を専門に学び研究するようになった。

高校の授業は7割が講義形式、3割が探究型授業であった。ある時日本史の探究型授業を体験した。「日本人社会には先輩後輩の関係が強く、なぜ敬語をつかうのか」が問われ、自分の意見を根

拠となる資料を添えて提出することが求められた。様々な見解が出され、考えさせられ、正解は一つではないという授業を体験した。その体験の中で、現在の問題が過去の歴史に繋がっているということに気付き、日本史を学ぶ方向に進路を変更した。探求型授業にも魅せられた。

ダッタ先生はその後 ICU（国際基督教大学）、British Columbia, Bancuba などで「日本史」を専攻され、教育現場で 20 年の実践体験をもたれ、現在は東京学芸大学教職大学院准教授であり、多角的、多面的分析力の育成を目的とした探究的授業を開発されている。

ダッタ先生にはもう一つの肩書がある。国際バカロレア教員養成プログラムディレクターである。（IB（国際バカロレア）Teacher Training Program Director）文科省委託研究「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」で、研究主任をされている

アカデミック・ハイジャック

ダッタ先生は日本語に堪能で（英語も堪能で英語での授業、講義も行う）冗談も流行の言葉も折り込み、ジェスチャーも交えて講義をされ、我々の考える大学の先生とは異なるスタイルで講演を始められた。講義を聞きに来た教員も我々OBも先生流の参加型授業形態の中に取り込まれて進行的た。その合間に先生の教育哲学が披露された。

- ・教育はほぼ 10 割モチベーションである。
 - ・「勉強する」理由がなければ勉強しない。
 - ・疑問こそ知識のエッセンス。
 - ・Teacher, educator, facilitator・・・教師は問いや学びのファシリテーター。
 - ・教科書、指導書、授業教授法本、教員研修はそれらを超えるためにも必要。
 - ・やみつきになるアカデミック・ハイジャック。
- facilitator とは何ぞや？ 帰宅して辞書を引くと「助言などをして会を上手く進行させる人」とあった。生徒が主体となって学ぶ、それをサポートするのが教師の役割ということである。アカ

デミック・ハイジャックとは大学で経験したゼミの手法を参考にするということ。

先生の講義だけでなく在職中の大学院の院生（研修で在籍中の者も含む）もこの講演に参加し発表を行った。院生にとっても「参加型の学び」を実践していることになっていたのであろう。

参考になったことを一部掲載する。

＊ ＊

今回の指導要領改訂は地理・歴史科にとって大変大きな変化である。

新指導要領・世界史探求とは

■新学習指導要領、地歴科についての概略を教職大学院 1 年生が報告。

まず歴史総合（2 単位）地理総合（2 単位）が必修である。計 4 単位。その土台の上に日本史探究・世界史探究・地理探究が選択科目として各 3 単位である。歴史総合を取り上げるとその内容構成は、

- A 歴史の扉
 - (1)歴史と私たち (2)歴史の特質と資料
- B 近代化と私たち
- C 国際秩序の変化や大衆化と私たち
- D グローバル化と私たち

近代史、現代史中心で日本史、世界史の両面から社会的事象を取り上げ、課題を設定し、追究したり解決したりする活動を通して歴史的な見方考え方を育成する。

- ① 時系列に関わる視点
- ② 諸事象の推移に関わる視点
- ③ 諸事象の比較に関わる視点
- ④ 事象相互のつながりに関わる視点
- ⑤ 現在とのつながり

世界史探究でも詳細で専門的な世界の歴史を学ばせるのではなく、広い視野での考察や地球世界の課題を主体的に学習する科目と規定されている。

＊世界史や日本史の科目の名称に「探究」をつけたのには、従来の暗記主義的歴史教育では駄目ですよという強い意図があるのだろう。

今頃気づいたのかといわれてしまうが・・・。

探求を基盤とした主体的学習

新指導要領で要求される授業の在り方「課題を設定し、多様な視点に注目しながら追究し解決する学習」について以下の実践報告があった。

■広島県立広島叡智学園高校から派遣されている院生の実践報告

■栃木県公立高校教諭の実践報告

■探究的学習における評価 大学院1年生の発表である。

問題解決学習とか課題解決学習といっても学習の評価をどのようにするかは難しい。

ここで「形成的評価」という言葉が登場した。関連して、評価のルーブリック（項目別進度表）。参加者の中にはこの用語を知っている者もあり、現場で必要とされ、使われているのであろう。いくつかの書籍の紹介もあった。

形成的評価とは「生徒の学習を支援するために行う評価」であるというが、本当に可能なのだろうか？ そのような評価法を生徒や保護者は納得するだろうか？

大学の入試問題が変わらなければ、従来通り暗記中心の歴史学習を行わなければならない。大学側の対応はどうであろうか？

共通テストでは「学習の過程を意識した問題の出題」が求められている。今までに2回行われたプレテストと「新学習指導要領」の関係については予備校などにより出題傾向が分析されているという。後日ホームページで知ったが、出題には「学習の過程を意識した出題」などの新傾向が何割かあるという。

プレテストの数学などにおいて、解答できない者の割合が多かったという報道があったが、世界史や日本史はどうだったのだろうか。これにより、教科学習法を変えなければいけないという決意を現場の教員にさせているのであろうか。残念ながら退席せざるを得ず、発表者と参加した教員とのやりとりを聞くことが出来なかった。

＊ ＊

時間の制限のある中で盛り沢山の問題提起や実

践報告があり、まとめることが難しいが、ダッタ先生の述べた次のような言葉が気になった。

変化のペースが急速な現代社会にあって各国が教育の在り方について新しいシステムを取り入れ改革が進んでいる。探究を基盤とした主体的な学習方法をどのように構築していくかが求められている。新指導要領はその流れに沿っている。しかし、日本の教育の方法は新しい時代に対応していないものである。今までに成果を挙げた教育方法は現在は通用しない。日本経済の今後の見通しについて今経済界は強い危機感を持ち、人材の育成について大手の企業人がダッタ氏の講演を聞きに来てしている。そこでは「日本の教育で育てられた人は雇えない」という声も聞かれる。

国際バカロレア教育の方法

ダッタ先生の教育方法の提案が内外から注目されているのは、国際バカロレアに対応する教員を養成している実績が注目されているからであろう。

国際バカロレア教育とは何か。最近出版された山川出版社「世界史の研究」259号に「DP HISTORYにおける批判的思考スキルの育成」（山本勝治）という実践報告が掲載されている。そこに国際バカロレアについての説明があり、その授業で行なわれている教育方法が紹介されている。今回の講演を理解するために役立ったので、簡単に紹介させていただく。

「学芸大附属国際中等教育学校」は国際バカロレア資格を目的としてカリキュラムの組まれている学校である。2007年に開校した上記中等教育学校では、1～4年生（中学1年～高校1年）に国際バカロレア（International Baccalaureate' 略してI.B.）の中等教育プログラム（MYP）に基づく教育を行っている。2016年からは、5～6年生（高校2年～3年）対象にディプロマ・プログラム（DP）の授業を行っている。2019年3月に2回目のDP卒業生を出している。DPでは6の教科のうちから6科目と3つのコアの全てを規定にしたがって履修し、一定の条件を満たせばフル・ディプロマ＝大学入学資格を取得することが出来

る。世界各地に、また日本にもこの制度と提携した大学が増えている。

地歴・公民に該当する教科は Individuals and societies(個人と社会)で、その中に History がある。11 月の最終試験までに約 2 年間で 240 時間、5 単位ずつ計 10 単位の科目である。

一定の条件を満たせばというが、それは簡単なことではない。国際バカロレアが要求する学習法を取得したことを踏まえた 3 種類の最終試験と学校独自の評価をする個人研究の評価を合算して合否が決定する。卒業(大学受験資格)獲得最終試験は論述式で高度な批判的思考スキルが要求される。

そのため、学習は従来のような講義型の学習方法では対応できず、探究するテーマを決め、複数の異なる視点からとらえ、比較し、関連づけ、批判的に論ずるなどの方法で生徒自身が学びをつくっていく。授業をファシリテートする教師に要求される指導力は大変である。まさに教師自身の「探究の学び」に向けた継続的ブラッシュアップが必要である。

バカロレアという言葉を聞くと、第二次大戦後のフランスで活躍したサルトルやボーヴォワールを思い出す。彼らはフランスで「バカロレア」といわれる超難関試験に合格した人たちだといわれ、それを知っただけで崇拜してしまったものである。その超難しい「大学受験資格」が「国際バカロレア」としてフランスのみでなく(組織はスイスに本部を置くが)世界各国に広がり、そのライセンスを得た人々が「新しい知のスタイル」をもち、世界をリードしていく時代になっているのだろうか。グローバルに活躍できる人材の育成がここの教育の目標である。世界 153 ヶ国に 5,000 校があるという。

数年前から我が国にも国際バカロレアを目的とする学校が生まれ(認定校数 37)卒業生を出しているという。都立高校では国際高校がこのプログラムを入れている。学芸大附属の国際中等教育学校はトップを走る実験校なのであろう。

※※

ダッタ先生が国際バカロレア教員養成プログラ

ムのディレクターであることと「新学習指導要領」が次第に結びついてきた。新しい学習指導要領に取り入れられた探究型学習法のモデルが日本にはないのである。飛びついたのが「国際バカロレア」のプログラムに基づく学習法なのである。

しかし、バカロレアに合格するためには従来の日本の教育システムでは合格しないのであり、全く異なる学習方法を早急に立ち上げなければならず、学芸大学大学院をはじめとして現在、多くの研究者や選ばれた教員がその道を拓いているところである。ダッタ研究室の院生もその候補であろう。

激動期、未完成の学習法

今回の講演は国際バカロレアへの道を拓いてきた(あるいは拓きつつある)人のステージであった。しかしまだ未完成の学習法であった。学ぶことは多くあると思うが、果たしてこれが普通の都立高校の先生にとって役に立つ授業法だったろうか?

国際バカロレアを目指す一握りのエリートたちの学びの方法を(しかも未完成の)そのまま勤務校の授業に取り入れてもうまくいかないうであろう。

国際バカロレアのために「深い学び、探究的学び」を実践している学大付属国際中等学校の場合、History の生徒数は 15 名であるという。

新しい歴史学習法に同意を示した油井大三郎先生が雑誌『世界』2019 年 3 月号に「歴史総合」への期待を書いている。そこに「韓国の高校での授業風景」という小さな写真が載っているが「生徒が 20 人位の少人数教育が印象的」と書かれている。

現場の先生たちは混乱しているであろう。つい最近中学 2 年生の歴史分野の教科書を見た。相変わらず沢山の歴史用語に溢れ、確かに中学までの学習で普通の日本人には十分であると感じた。中学生は、なにかわからないことがあると、スマホやタブレットでチャットチャットと調べる。高等学校は従来の学習法では授業が成立しないであろう。現在の日本の教育は明治維新と同じくらいの激動期にあるという。そういうことなのです。

高句麗遺跡と後金史跡を巡る

増田克彦

中国東北部への旅と言えば、礪波 進さんが都歴研会長の時だったと思う、2002 年 8 月の全歴研・都歴研共催の海外研修、「中国東北地方の史跡を巡る 7 日間」。主な見学地は日清・日露戦争関連史跡だったような気がするが、この時これになぜ参加しなかったのだろう、全く記憶が無い。今回は遼寧省の瀋陽市と本溪市桓仁県、途中撫順市に立ち寄り、メインは吉林省集安市。

中国旅行は常に贖罪の旅でもある。日本人に対する相応の感情があるはずにもかかわらず、中国の人達はそれを全く表に出さない。日本帝国主義と日本人民は別という 70 年以上前の中国共産党の姿勢が浸透していると言えばそれまでなのだが。それだけになおのこと辛い。まして今回は旧満州である。

それにしても中国の変わりようは、今更ながらではあるものの、ものすごい。筆者が最初に中国を訪れたのは 40 年程前。現在、気の毒な程に、街の衛生・食品の安全・多様な犯罪の防止に力を入れているが、このような地方にあっても高速道路は縦横に延び、街中の道路もビルの林立する街並みも、ホテルも商店も、そして歩いている人々も、その全てが恐ろしい程に清潔になり美しくなった。ウォシュレットはまだだが綺麗になったトイレはまさに隔世の感。乗車しなかったが瀋陽には地下鉄が 2 系統。国慶節の期間が過ぎたばかりの中国、大規模な装飾が街角や公園のそこそこに残る美しい情景である。

今回の見学先は、瀋陽ではヌルハチの福陵（東陵）、ホンタイジの昭陵（北陵）、瀋陽故宮、そして時代は一気に下がって、張作霖・張学良父子の邸宅だった張氏帥府、関東軍司令部などが立ち並んでいた中山広場。桓仁（懷仁）では、このところ韓流歴史ドラマで名を馳せている東明王（朱蒙

（在位 37～19 B. C.）が築いたという五女山城の跡と博物館。集安（輯安）では 437 年にその都を平壤に移すまでの 400 年程都としていた国内城と丸都山城の跡、壁画の

ある 5 号墓、知らぬ者は誰一人いないであろう広開土王（好太王）碑、太王陵、長寿王陵（將軍塚）、ついでに鴨緑江とその対岸、朝鮮民主主義人民共和国の山並と人家の眺め。

成田から瀋陽に飛ぶ。ものの 3 時間。時差が 1 時間。年を取ると 9 時間 10 時間の飛行は苦しいからこの短さはありがたい。短いという事は安価でもあるということだ。

瀋陽は遼寧省最大の都市。春秋戦国期・漢代には侯城、唐代には瀋州、元・明代に瀋陽、後金・清代に盛京、清代、ここに奉天府が置かれたことから満州国で奉天、そして中華人民共和国成立後瀋陽と名を変えている。瀋陽の福陵、昭陵は、明の十三陵などと共に「明・清王朝の皇帝墓群」、瀋陽故宮は北京の故宮と共に「北京と瀋陽の明・清王朝皇宮」として、共に 2004 年世界遺産登録がなされている。福陵、昭陵共に盗掘されていないとことで、小ぶりながらも美しい姿を残している。瀋陽故宮は北京の故宮の 12 分の 1 の規模だそうだがなかなかどうして壮麗である。

瀋陽に住む 29 民族中満族は 40 万人とか。満州



広開土王（好太王）碑



長寿王陵（將軍塚）

文字の読める者は今やいないとのこと。

張作霖・張学良父子の邸宅だった張氏帥府。張学良の大きな銅像が立ち、張作霖爆殺の様子から張学良の西安事件、彼がハワイで亡くなるまでの親子の生涯が丁寧に展示されている。そして関東軍司令部などがその周囲に立ち並んでいた中山広場。中山広場の中央にはなぜか巨大な毛沢東像が立つ。

専用バスで瀋陽から桓仁に向かう。どこまでも続くトウモロコシ畑、高粱畑。取り入れが進んでいる。紅葉が美しい山々の稜線はどこか日本の情景と似ている。高句麗の人々が日本列島に愛着を感じたのも一理ありそうな感もある。途中、撫順で昼食を摂った。撫順は遼寧省第四の都市。雷峰の名を冠した体育館、タクシー、高速入口などがあつたため現地ガイドに聞いたところ、雷峰に学ぶという学習会も行われているとのこと、半世紀以上前の話なのにと驚かされた。

五女山城跡は、博物館を抜けると大きな「高句麗始祖碑」、近くのバス乗り場から小型のバスで10分程登り、その駐車場からは900段の何とも言えずきつい登り。礎石があるだけの山頂。麓の博物館は立派と言えば立派なのだがまだまだ未整備。展示品の殆どはレプリカ、説明も不十分、誤解される恐れもある。図録もない。5・6年後には整備されるのだろう。

桓仁県は満族自治県。観光客の増加を見込んでか建設ラッシュ。観光客そのものが多いとは言えず、現在は中国・韓国が殆どでそれに日本からの客が加わる程度。ヨーロッパ人の姿は全くと言っ

て良い程目にしなかった。

瀋陽・集安間は距離にするとバスで5時間程。高速道路は桓仁までで集安へは現在建設中。集安は史跡として、丸都山城地区、禹山貴族墓地地区、好太王碑地区、長寿王陵地区、これに国内城遺跡が加わる。その中心に高句麗文物展示センターが置かれ、「古代高句麗王国の首都と古墳群」として2004年世界遺産登録がなされている。

集安も建築ラッシュ。しかし表通りは綺麗にしながら、昔のままの家々が残っているところは長大な塙で隠すという、いかにも中国らしいやり方で進められている。

集安は鮮族自治市。吉林省第四の都市。医薬品・ワイン・蜂蜜、何よりも中国における朝鮮人参の最大の生産地とのこと。

戦時の避難王宮として作られたとも言う丸都山城の跡は格好の歴史公園。中国人の観光客も多い。広大な敷地内には王宮跡や士卒の詰所、見張り台、井戸、加えて貴族の墓という夥しい数の盛土の円墳と石積みの方墳。

禹山貴族墓地地区の壁画のある5号墓は、なんと工事中とかで見られず。どうやら全てが国慶節までで、国慶節が終わると季節的に冬に入ることあつて、観光施設は次々に閉じられるようだ。大きな蓋屋の中に好太王（広開土王）碑、なぜか撮影禁止。禁止する理由が見つからない。あまりにも碑が大きすぎて、どこにどのような文字が刻まれているのか見当もつかない。同じ敷地内に太王陵、登れば中国側のビル群の先に、遠く朝鮮民主主義人民共和国の山並が望める。売店には拓本も無ければ写真も無い。

四方に立てかけてある二つずつの巨石は階段状に積まれた石の崩れるのを支える意味があると説明されている長寿王陵（將軍塚）。長寿王（在位413～91）は、父の広開土王（在位391～412）、孫の文咨王（在位492～519）と共に4世紀末から6世紀初めまでの朝鮮半島の大半と遼東を押さえる高句麗の最盛期を形成した王の一人。長寿王陵（將軍塚）の内部は、五女山城博物館に、同時期の、ほぼ同型の復元模型があるが、四方の壁面の蓮華

文、天井の円文など朱を主体とした色彩豊かな玄室である。長寿王陵もそうだったのだろうか。長寿王陵の周囲には盗掘の凄まじい小ぶりの陪塚支石墓、祭祀跡、井戸跡など。医療施設まで付いているここの施設も新しい。ショッピングセンターは国慶節が終わったので閉めたとのこと。何ともついていない旅行である。

平地にあったためか、ほんの少しの石垣のみが残る国内城跡。ついでに鴨緑江とその対岸、朝鮮民主主義人民共和国の山並と人家を眺める。500メートル先まで撮影禁止とあるのにガイドは構わないという。毛沢東と金日成の時に鴨緑江は共同

使用となり、上陸はできないものの船で対岸まで行けるとのことだった。

その晩の夕食会場は、例の、中国を初め各国で北が経営する朝鮮料理屋。米朝や南北間の交渉過程で一躍有名になった冷麺も頂く。具が少なかったこともあるのだろうが、さほどのものとも思えない。一杯 40 元。日本円に直せば 680 円。北のビールも頂く。中国のビールがなべてアルコール度数 2 から 3%なのに対し、これは 4%。ビールらしいビールをこちらに来て初めて味う。ラベルを頂いて帰ってきた。集安は、もう一度訪れたい土地である。

史料紹介

旧満州 安奉線の歴史

滝 沢 順

最近、小さなオークションで、昭和 6 年(1931)に満州の独立守備歩兵第 4 大隊が発行した「安奉線の歴史」という小冊子入手した。

安奉線は南満州鉄道の一支部で、安東を起点として蘇家屯を終点とする。ここからは満鉄本線(連京線)で奉天まで連絡していた。

安奉線の発端は日露戦争に際し、日本軍が軍事輸送のため安東から建設した軽便鉄道であった。広い平野部を走る満鉄本線(連京線)と異なり安東からの鉄道は、急峻な山間部を縫って建設された。河川にかかる橋梁は 423 橋に及ぶなど建設は困難を極めた。日露戦争後、清国との協定で軍用鉄道から商工貨物の輸送のために改良することを認められた(日清満州善後条約付属協定第 6 条)。その時の取り決めでは工事完了後 15 年を期限に清国に売却することになっていた。

南満州鉄道はロシアの経営していた鉄道を引き継いだのに対し、安奉線は歴史的にも協定上も別のものであったが、日本は安奉線を満鉄の支線とし軍隊や警察など満鉄と同等の権益を持とうとしたため清国政府の反発を買い改築工事は遅れた。



安奉線の開通と鴨緑江の鉄道橋の建設で新義州から朝鮮鉄道の京義線や京釜線と直接つながり経済的にも軍事的にも日本にとって意義あるものであった。1912(明治 45)年 6 月 15 日より釜山〜奉天

間の直通急行の運行がはじまりこの急行と同じ日に東京～下関間に特別急行の運行がはじまった。

新橋を8時30分に発車して翌朝9時38分の下関着。下関から10時40分発の関釜連絡船に連絡して20時10分に釜山着。20時50分の連絡急行で新義州に3日目の15時50分着。鴨緑江を渡って15時35分(時差1時間)安東着。直ちに列車で21時55分に奉天着。長春には4日目の4時50分着であった。所要時間は69時間20分であった。この列車は奉天では、満鉄本線の急行列車に併結されて長春に至り、ここで東清鉄道に連絡した。その後、鉄道の改良により所要時間は大幅に短縮された。現在は瀋陽(旧奉天)と丹東(旧安東)を結ぶ瀋丹線となっている。

史料「安奉線の歴史」を作成した独立守備隊は、関東軍に従属する部隊で、南満州鉄道とその付属地を守備する軍隊である。歩兵を中心に砲兵・工兵・騎兵などを含む部隊であった。

本史料はガリ版で和紙に印刷され紙縫りでとじられている。パソコンに入力するにあたり漢字の多くは旧字体でなく新字体で入力した。本史料では句読点の多くは省かれている。史料に忠実に句読点を省いた状況で入力したが、読み易いように句読点の部分には1字分の空白を設けた。

なお史料「安奉線の歴史」の謄写頒布された昭和6年は、満州事変の勃発した年であり、3月10日は、日露戦争で日本軍が奉天を占領した陸軍記念日である。

史料

安奉線の歴史

昭和六年三月十日

独立守備歩兵第四大隊

抑本編は当大隊第一中隊長蔵重大尉が多忙なる公務の余暇調査研鑽せるものにして良参考資料たるものと認め謄写頒布する事とせり

昭和六年三月十日 大隊長 板津直純

安奉線の歴史

日露戦役の際 第一軍兵站諸部隊は明治三十七年三月中旬から同下旬に亘って韓国鎮南浦に上陸以来其業務を開始し、軍の行動に伴ひ逐次兵站線を北方に延して行つた、而し乍ら兵站線は段々長くなって来るし輸送材料も人夫も或る者は賃金を得て之を所持することに不安を生じ、或る者は農繁期の為に、或る者は思郷心を起して大挙して逃走を企てる等の事があつて徴集使用に困難を来し加ふるに雨期に遭遇して連日の降雨に道路も橋梁も至る所破損流失し 輸送の困難名状し難きものがあつた、而も河川には橋梁がない 橋梁架設に従事した兵卒は完成した橋を四合橋、三合橋と名付けた、蓋し一日分の糧食を四合に減し、三合に減して架橋した事から此の名が生れたのである、輸送困難の一斑を窺ふに足る挿話ではあるまいか、斯して軍参謀より「内地の人夫四万人を募集せられ度き」旨の電報を大本営に発するに至り 大本営も始めて補給に関して考究せられた結果、手押軽便鉄道敷設の議起り三十七年五月十四日より安東県一鳳凰城間の工事に着手したが 地形困難で架橋多く且降雨があつて工事の進捗意の如くならず 多大の困難に打ち勝つて三十七年七月十三日に竣工を告げ、全線の運転を開始した、而しこの間にありても輸送を急ぐ必要があつたので五月二十八日から線路の一部が竣工する毎に輸送を始め湯山城までの輸送を開始したのは六月十九日であつた、所が戦闘の進捗に伴つて手押式では輸送力が不足を来したので大本営は更に之を機関車式に改造し 之を奉天に延長して安奉線と称するに至つた、始め此の鉄道は安東県から下馬塘を経て遼陽に向つて敷設しやうと計画したのであつたが作戦の進捗に伴つて下馬塘から奉天に向はしめたものであつた。而して機関車式の軽鉄は安東県一下馬塘間の建設は 臨時鉄道大隊長(工兵中佐井上仁郎)が之に當つて三十七年八月上旬起工し十月尽日鳳凰城まで布設し 三十八年二月十一日には下馬塘まで開通した、以後の建設は臨時鉄道大隊が依然従事したが 工事が未だ半分位の時、同

大隊は新民府付近に転進したので爾後の建設及運転共臨時軍用鉄道監部（鉄道監少将山根武亮）之を継承し三十八年十二月二日奉天まで開通した。而して之が依然兵站線として使用せられ兵站守備隊に依って守備せられて居たのであるが 三十八年十二月二十三日になって鴨緑江右岸の地は悉く関東総督府の守備地域となって第十四師団の歩兵第五十三聯隊が之に任することに定められ該聯隊は三十九年一月七日より前守備隊と逐次交代を始め二十七日完了した、斯うして日露戦争が終って日清満州善後協約付属協定第六条に 清国ハ安東県奉天間二敷設セル軍用鉄道ヲ日本政府に於テ各国商工業ノ貨物運搬用ニ改メ 引続き經營スルコトヲ承認ス

又該鉄道ノ改良方法二至リテハ日本国ノ經營擔者ニ於テ清国ヨリ特派スル委員ト切實ニ商議スヘキモノトス

とあるので 此の鉄道は戦後も引続き運転せられたもので玩具の様な汽車が危かしい、軌条の上をトボトボと走って居て安東県一奉天間に行くのに汽車は草河口で一泊したものである、夜間の運転が汽車その物としても危険であり又匪賊等の危険もあった為である、従って草河口は当非常な繁栄を来したもので 沿線でも有数の都会の觀を呈し旅館料亭等も可なり多かったとのことだ、当時の貨車は五噸位のもので時々之が脱線したり転覆したりしたものだそうだ、又線路も現在の安奉線とは大部異って平地や河に沿ふた地区を廻り道をして隧道等の無い所を通して居た、だから橋梁の数も多く細河三〇号(釣魚台付近)の名称もあった位だ、だから雨でも降って増水でもすると至る所橋梁流失して列車不通となって居た、斯くして明治四十年十二月下旬現在の独立守備隊が守備する様になったのであるが此の當時も運行妨害は可なり多くあったもので 守備兵の労苦は今も昔も変わらなかった様である

此の頃まで安奉線は関東都督府野戦鉄道提理部に属してゐたのであるが 四十年三月三十一日限り満鉄会社に引渡した

満鉄が野戦鉄道提理部から引継を受けた当時の

安奉線用輕便車両は貨車ばかりで 客車がなかったので 明治四十年度に於て三等客車定員八人の分九輛を 二噸貨車から二等客車定員十六人の分二輛 三等客車定員二十人の分二十五輛並に手荷物緩急車四輛及郵便緩急車八輛を何れも五噸無蓋車から改造して稍輕便客車の整備を見た

茲に於て会社は明治三十九年八月一日付の政府命令に依り会社經營になってから三ヶ年以内に本線を軌間四呎八吋半の標準軌道線路に改築する事になった 而して是が改築に当っては清国の特派する委員と商議する必要があったので明治四十二年一月から交渉を開始した

元來会社設立に際して帝国政府から満鉄会社に與へられた命令書中最も急を要したものは 大連一長春間の軌道改築と大連蘇家屯間の復線工事であったので 会社は先づ是等の工事を竣成し、次で安奉線改築工事に着手するの方針をとった、従って安奉線改築に関する調査も亦漸次其の歩を進め臨時軍用鉄道監部に於て標準軌道線路として測量したものに基き更に踏査を行ひ二ヶ年間に略々其方針を決定し 起工準備を整へることが出来た、然れ共改築の方法に至っては 清国より特派する委員と特に商議する必要があったので前記の如く明治四十二年一月より公然清国に対し交渉を開き先づ鉄道線路実査の為委員の協商を要求し其の結果満鉄会社及清国政府は共に二名宛の委員を選定し同年三月奉天総督衙門で会見商議した、而して各委員は安奉間予定線路全部を踏査し 実施に就て仔細に商議しつつ同月下旬安奉県に到着し 遂に四月上旬を以て鎮相屯奉天間約二十哩の少区間を除く外 清国委員は該線路の適當なることを認め 其の主旨に依り清国政府に報告をなすの運びに至った

而して鎮相屯一奉天間の線路に関しては容易に清国政府と交渉が終わらないので 我政府は安奉鉄道改築急施の目的を達するが為 取り敢ず此の区間の改築問題は後廻しとして清国側で意義なき陳相屯以南の工事を施工せんとして両国委員立会踏査終了後直ちに改築の為必要なる土地の買収に着手し度き旨を清国政府に申し入れた 然るに清国

は徒らに言を左右に托し容易に我が要求に応じなかった為 交渉は一転して奉天帝国総領事と東三省総督との間に移り 我が政府が累次清国に対し理を尽して要求に対する応諾を求めたるに拘らず六月二十四日こ至り次の如き極めて不当な要求を為して来た

一、安奉線ノ改築工事ハ単ニ現在ノ路線ヲ改良スルニ止マリ軌条ヲ拡張シ線路ノ更生ヲナスハ之ヲ許サス

二、現在日本政府ヨリ派遣セル鉄道守備兵ハ即時之ヲ撤退セシムルコト

三、日本警察ハ其ノ全部を挙ケテ直チニ之ヲ撤去スヘキコト

(其他略ス)

されとも我が政府は斯くの如き問題で両国の親交を傷けることを憂ひて 更に我北京駐在公使をして清国政府に是が交渉をなさしめたが 清国政府は荏苒何等適当な回答を与へなかったので 帝国政府は止むを得ず条約上の権利と日支欧亜交通の為に明治四十二年八月六日伊集院公使をして清国政府に対し次の最後通告を為し 翌八月七日先づ福金嶺隧道及其の前後土工工事に着手した

貴国政府ハ徒ラニ辞柄ヲ設ケテ数月ノ久シキ之レカ応答ヲ遷延セラレ六月二十四日ニ至リ漸ク東三省総督ヲ経テ我ニ出サレタル回答ニ依レハ其内容ハ頗ル妥当ヲ失シ守備兵及鉄道警察ノ撤廃ノ如キ線路改築ト何ラ関係モナク而モ之力回答ハ北京条約ノ精神ト日本政府隨時ノ声明ニ照シ日本政府ノ不可能トスル所ナルコトヲ明ナル問題ヲ提起シ以テ改築工事施行ノ条件トセラルルノミナラズ改築工事ノ主眼タル軌道ノ取捨ケ及技術上必要欠クヘカラサル線路ノ更正スラ之ヲ目シテ改築ニアラズトナシ拒絶セラレタリ・・・日本政府に於テハ甚だ遺憾ナガラ止ムヲ得ス世界交通ノ利便ノ為 条約上の権利ニ基キ貴国ノ協カヲ待タス自ラ安奉鉄道ノ改築ヲ実行ス

茲に至って清国政府も帝国善意の主張に服従するの外なく越えて十三日伊集院公使に対し安奉鉄道改築の急務なることを認め是が為に必要なる協力を為さうとする意思のあることを表白した 茲

に於て帝国政府は小池奉天総領事をして東三省総督錫良及奉天省巡撫程德全と交渉せしめ同年八月十九日を以て左記覚書に調印した

一、軌道ハ京奉線ト同様ナルコト 二、両国ハ大体ニ於テ委員力既ニ踏査決定セル線路ヲ承認スルコト

尤モ陳相屯ヨリ奉天ニ至ル線路ハ両国ニ於テ之ヲ協議決定スルコト

三、覚書調印ノ当日ヨリ直チニ土地購買其ノ他一切細目ニ付キ協議ヲ開始スヘキコト

四、覚書調印ノ翌日即チ前項協議ノ翌日ヨリ工事ヲ進捗セシムヘキコト

五、清国ハ沿道地方官ヲシテ工事ノ施行ニ関シ諸般ノ便宜ヲ與ヘシムヘキコト

比の覚書の交換に依りて 四十二年八月から改築工事に着手した

此の覚書調印前 七月下旬頃から八月中旬頃までは流言浮説が流布せられ 無智の清国民間には日清開戦すると云ふ様なことを思ふものもあったとのことである

尚清国官憲は安奉線問題が切迫するに伴ひ何か企図する處でもあったのか七月二十八・九日頃自国兵(巡警多数を含む)約四百名を変装させて窃かに本溪湖に入込ませた、之か頭領らしき者は時々本溪湖知県と会同しあり之等に要する兵器彈藥も巧に輸送せられ糧秣は太子河上流及遼陽方面から運搬せられた

彼等は八月初から三々五々窃かに本溪湖を出て四日朝までには殆ど全部出發して踪跡を暗ましたか其の一部は賽馬集方面に向かったらしく同地方には乗馬巡警が徘徊してゐた

本溪湖知県は 部下各村長に対して馬賊防禦を名として團練を設くべく命令を下した橋頭付近代家堡子には清国將校の率ゐる武装兵若干が 八月始め頃から駐屯して居った 之れ等は本溪湖に集合した連中だらうとの推測が行はれて居た 其の他安奉沿線には鉄道地帯の警備を理由として半官半民の自治的警察機關を設けたので 各所で日支官憲の衝突が起きた

斯くの如く支那側官憲の策謀と地形上から来る工

事其の者の困難とて極めて難工事であった。而し明治四十二年八月七日工事に着手してから先づ福金嶺隧道及其の前後土工工事に着手し、撫安連絡所―石橋子間（二七哩）の速成工事を起し、同年十一月三日奉天―石橋子間（三十五哩八鎖）（奉天―渾河間には本線、渾河撫安間には新連絡線及撫順支線を経由）に安奉線最初の広軌列車運転を開始した、是より先九月中旬全線に亘り殆んど一斉に工を起こし、同四十三年十一月三日安東―鶏冠山間（五三哩三二鎖）の速成工事先づ成り、越えて同四十四年一月十五日石橋子―本溪湖間（一哩七二鎖）特別急施工事を竣工し、共に広軌列車の運転を開始した、而して鶏冠山―本溪湖間（七三哩二四鎖）に於ける所謂山間線にありては隧道工事各所に散有し、加ふるに幾多の大小河川其の間に曲折して居たので勿論工事は非常な困難を見たけれ共、当事者の拮据奮励の結果何らの蹉跌なく進捗し起工以来僅か二年三ヶ月を以て明治四十四年十一月一日遂に全線の開通を告ぐるに至った。会社は本工事を起すに際し総予算額金二千四百七十万円と定めたが、其の総決算は工場費及撫安―樂天間の改築費を除き金二千五百二十万四千四百五十円六十銭八厘で予算に対し金五十万四千四百五十円六十銭八厘の不足を生じた。この決算額は安東―陳相屯間改築哩数百五十一哩二分に対し一哩当り金十六万六千五百八十五円九十一銭六厘を費した割合であった。

陳相屯―奉天間約二十哩は安奉線改築に際し日清両国委員会に於て線路位置未確定の故を以て交渉を後日に譲ったが、その後種々清国政府と折衝の結果、陳相屯より本線蘇家屯停車場に接続する事に決定し、大正七年五月着手、同八年十二月一日現在線の運転を見るに至った。是か工費は金六十二万二千五百四十四円で線路延長は十哩七十九鎖二節である。而して本工事完成と共に安奉線は蘇家屯から分岐することになったので、撫順停車場から陳相屯に至る間の線路は撤廃した。

而して改築工事と共に停車場電気通信設備其の他の諸施設を完成して爾来引続き今日に及んで居る。

会員の著書紹介

宮崎正勝著

『世界史の真相は通貨で読み解ける』

――銀貨、紙幣、電子マネーは社会をどう変えたか――

河出書房新社
2018年8月5日発行
新書版 224頁
820円(税別)

民族、国、権力者、イデオロギーを軸にし視点
をヨーロッパに固定した
世界史では、歴史のプロ
セスをトータルに理解することはできない。

なぜなら「通貨」と「経済」が世界変動の土台
になっているからだ。

社会のありようを大きく変える「通貨」とその
システムの変化から歴史を読み解けば、「今何が起
きているのか」「これから何が起こるのか」がリアル
に見えてくる。（本書の帯から）



宮崎正勝著

『ユダヤ商人と貨幣・金融の世界史』

原書房 2019年2月刊
A5判上製 326ページ 定価2500円＋税

なぜ「亡国の民」が世界の金融を動かしてきたの
か? 「ユダヤ人」「ネット・ワーク」をキーワード
に経済の歴史の大きな流れを一気につかむ。第1
章古代に 西アジアと地中海で活躍したユダヤ商人
第2章ユーラシア商圏で活躍するユダヤ商人
第3章大航海時代のユダヤ人 第5章英・仏
の長期の植民地戦争と宮廷ユダヤ人 第6章宮廷
ユダヤ人ロスチャイルド 第7章アジアの銀経済
を掘り崩したイギリス 第8章新興アメリカの金
融をリードしたユダヤ系資本 第9章新大陸へ
の派遣の移動とウォール街の興隆 第10章戦後
経済の節目でリードし続けたウォール街（本書の
帯から）

国際交流の中国旅行

豊田 岩 男

2018年8月7日（火）、8時40分羽田空港発MU576便（中国東方航空）で中国の上海に向けて3泊4日の旅に出発した。都立高校教員OB3名と日本国際協力センター職員2名の計5名の小グループ旅行である。

フライト時間約2時間30分で上海浦東空港に着陸した。（現地時間10:10）中国入国時に指紋の登録が必要であり、そのために列を作って並んでいると、私を含めた2名はその必要が無いと言われた。70歳以上の老人は、1人前の社会人としては認められていないらしいのである。

私は上海には数回来ているし、時間の制約もあるため、同行者の特に見学希望地である旧租界地のみを訪れた。

上海外灘の高層ビル群

上海外灘（旧租界地があった辺り）から見る対岸の高層ビル群の中に俗称「栓抜きビル」があり、これは日本の森ビルが建てたもので、しばらくの間上海で一番高い建物であった。このことが中国人にとっては気に入らないことであつたらしく、



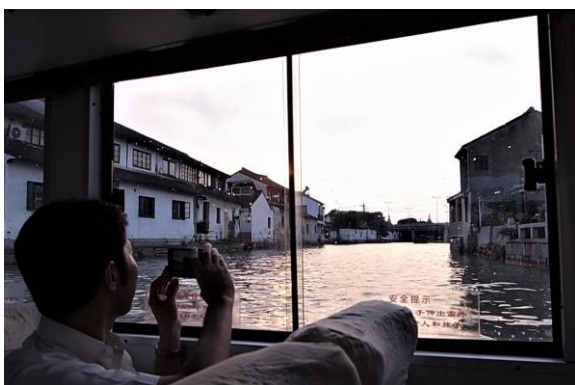
外灘から見える高層ビル群

「栓抜きビル」のすぐ横に、数年前から自国資本のビルを建て始め、瞬く間に上海一の高層ビルを完成させた。現在は、その様子をここ外灘から眺めることが出来る。

蘇州の古運河の夜景

上海からマイクロバスをチャーターして蘇州へ向かった。蘇州市では、古運河の遊覧予定があつたため遊覧船の発着場である山塘河に17:50頃到着した。私達5人と案内役の呉さんを加えた6人で遊覧船に乗り込み、夕日に染まる運河や兩岸の家並みを眺めて一時を過ごした。1時間弱で遊覧を終え、運河近くで夕食を取りホテルへ向った。途中、運河が照明されていて夜景がとても美しかった。

この蘇州の古運河は9世紀の前半に白居易により開削されたもので、今では、隋の煬帝により建設された大運河の一部になっている。白居易（字は白樂天）は、西暦800年に29歳で進士科に及第し、国家の役人となり、9世紀前半に杭州と蘇州の刺史（長官）として勤務した。



蘇州古運河の夕景

8月8日（水）午前中、太湖石で有名な留園と仏教寺院の西園寺を見学し、蘇州の高速鉄道の駅に向かった。高速鉄道は11:27に蘇州駅を出発し、12:45に南京駅に到着した。沿線の周辺は中国でも最も豊かな農耕地帯で、田園風景が広がっていた。

今回、蘇州から南京まで利用した高速鉄道は日本から技術を導入して建造されたもので、外観も内装までも日本の新幹線とそっくりであった。中国は、この高速鉄道を自国独自の技術で建造したのとして、さらに海外に輸出しようとしている。

南京の六朝博物館で

南京ではまず、六朝博物館を訪問した。六朝とは、三国時代の呉、東晋、宋、齊、梁、陳を言い、後半の宋、齊、梁、陳の4王朝を中国史では、北魏以後の5王朝を北朝と言うのに対して、南朝と言い、西暦420年から西暦589年の間のことであった。都はほぼ同位置で名称は建業、建康と変遷した。

この博物館を訪問にするに当たり、日本の高校では、六朝文化についてはこの程度のことを教えています、ということをお伝えするために山川出版社の高校教科書・詳説世界史の三国時代から六朝時代のページをコピーして持参した。最初にこのコピーをお渡ししようとしたところ、その内容をざっと見て、これは受け取れないと言うことであつた。その教科書の同じページ内に東アジアの地図が載っており、その地図内に東シナ海や南シナ海という名称が入っていた。この「東シナ海」や「南シナ海」という名称が良くないということで受け取れないとのことであつた。中国では、公立の学校や博物館には共産党機関から校長や館長と

同等の権限を有する人員が配置されており、学校や博物館の運営をチェックしているようである。今回の場合も、館長と党から派遣された人物からの応対を受け、後者の人から上記の指摘を受けたのである。

既述のように、六朝の都は建業から建康へと名称は変遷するが、位置はほぼ同一の所に立地しており、現在の六朝博物館はそれらの遺構の上に建てられている。博物館の地下には、その遺構の一部が保存されており、入館者も見学できるようになっている。

六朝文化は、中国文化の諸領域の源流をなしており、書、絵画、文章等の諸分野の祖と呼ばれる人をこの時代は輩出した。また、この時代には、素焼きの陶器に上絵や文字を施し2度焼きした陶器も初めて出現した。

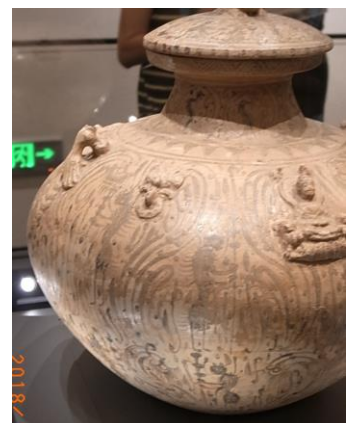
この頃の日本は、宋書倭国伝の言う倭五王の時代で、その内の1人、倭王武は雄略天皇（獲加多支鹵）に比定されている。この天皇は、中国の南朝に複数回使節を派遣している。

この博物館の展示品がより充実することを願い、また機会があれば、再度この博物館を訪問したいと思った。

17:10に双門樓賓館ホテルに到着した。そして、18:25にホテルの近くの江蘇省人民対外友好協会へ行き、友好協会副会長の蔡錫生氏等と共に会食と懇談（18:30～20:30）を行った。その後ホテルへ戻り、各自の部屋に別れ就寝した。



六朝時代の都の遺構



初期の絵付け陶器

江蘇省教育庁を訪問

8月9日(木) この日は
先ず、江蘇省の教育庁を訪問した。国際合作与交流処副処長施蘊玉氏等の応対を受け、種々の教育問題について意見交換を行った。日本側は高校教員OBの3名(70歳以上2名)と日本国際協力センター職員2名の5名で、中国側は教育庁の職員3名(30歳台～40歳台の全員が女性)と通訳2名の5名であった。特に中国側は、日本の基礎教育に関心があるらしく姉妹校を欲しがっていた。約2時間弱の会談の後玄関ホールで記念写真を撮り辞去した。

明孝陵と中山陵

昼食後、チャーターバスで明孝陵と中山陵の見学に向かった。14:10頃、明孝陵の入口に到着した。明の太祖朱元璋洪武帝は、1368年に南京に都を置き中国を統一した。明は江南を根拠地として中国を統一した唯一の王朝だったが、しかし、3代目の永楽帝は、モンゴル人対策のために都を北京に移してしまった。明孝陵は朱元璋とその妻の陵墓であるが、行ってみて分かったのだが、呉の孫権の陵をまたぐような形で建造されており、山上の明孝陵に至る参道は孫権の陵を避けて二俣に



明孝陵参道

分かれていた。

孫文の号は中山と言い、中山陵は近代中国を建設した孫文の陵墓である。この陵も山上に建造されており、お参りするのに急坂を登らなければならず、8月の暑さにも勝てず、私は途中で参拝を断念した。17:00頃に中山陵を出て、夕食はホテル外で取り、20:40頃に双門楼賓館に到着し、各自の各部屋に別れた。

8月10日(金) 6:25にホテルを出発し、7:00南京駅発の高速鉄道に乗り 8:50に上海駅に到着した。ここからリムジンバスで浦東空港に向かい 10:30に空港に到着した。14:00発(日本時間 15:00)中国東方航空MU539便で羽田に向かい、17:30(日本時間)に羽田空港に到着した。5人はお互いに無事であったことを祝して解散した。



六朝博物館訪問記念写真



江蘇省教育委員会訪問記念写真

千住宿 まち歩き

矢 島 恒 之

小金井で文化財を守る会などに携わっている昔の同僚が、千住宿の史跡散歩の下見を行うという。2019年3月29日(金)、私も一緒に、私の住む北千住の町(旧千住宿)を南千住駅から歩いた。

1 千住の沿革

千住の地名は、勝専寺(赤門寺の名で知られる)(鎌倉時代の1260(文応元)年草創)の寺伝によれば、この寺を開基した新井兵部政勝の父新井図書政次が荒川(現在の隅田川)で千手観音を拾ったことから、この地を千手と呼んだことにはじまる。地名の由来は、その他にもいくつかあるが、その一つに室町時代の山内・扇谷上杉方と古河公方足利成氏が争った享徳の乱(1455～83年)のとき、千葉氏の内部争いから下総国を追われた武蔵千葉氏が住んだことによるなどがある。

武蔵国足立郡千住村は荒川を利用した水上交通の要衝であった。1590(天正18)年豊臣秀吉が小田原の後北条氏を征服した後、関東に移封された徳川家康は、江戸城を中心に領国の整備を進めたが、1591(天正19)年には千住の検知を行った。1594(文禄3)年には、関東郡代伊奈忠次が荒川に千住大橋を架け、1597(慶長2)年には千住村を奥州街道・日光街道の人馬継立の地に指定し、千住町とした。

1625(寛永2)年の五街道整備によって、奥州・日光街道の初宿となり千住町は交通量が増大し、町域も広がった。

『千住旧考録』(足立区立郷土資料館収蔵資料検索システム)によると石出掃部介の新田開発によ



って1616(元和2)年に掃部堤(現墨堤通)が築かれ、荒川の堤防となった。掃部堤と荒川の間にあった、天正年間(1573～91年)に始まっていた「やっちゃ場」では野菜や川魚の荷扱いが増え、千住大

橋沿いに橋戸河岸が設けられた。1658(万治元)年にはこの掃部堤と荒川の間、掃部宿、橋戸町、河原町などの新しい町が千住宿に加えられた。さらに1660(万治3)年には荒川南岸の小塚原町、中村町が千住宿に加えられた。

この小塚原町には、江戸の三大刑場の一つである小塚原刑場が、1651(慶安4)年に創られている。

『新編武蔵風土記稿』によれば、千住宿は「駅の広さ東西14.5町、南北3.5町ありて、宿並間



④大日本沿海輿地全図より
⑤広重画「千住の大はし」

数1,256間、その左右に旅亭商家軒をならべて、旅人絶ゆることなく、もっとも賑はへり」と記録され、幕末期には家数は2,400軒近く、人口は約1万人に達したという。

2 南千住を歩く

南千住駅は、JR常磐線、地下鉄日比谷線、つくばEXの3線の駅が近接している駅で、以前の町の面影がまったく残っていないほど再開発が進んでいる。西口広場から常磐線の高架線路に沿って南に進み、山谷通り(通称コツ通り)を渡ると、江戸時代の小塚原刑場跡と回向院、延命寺がある。

ここ回向院の史跡区域には安政の大獄で刑死(伝馬町牢屋敷で処刑)した長州の吉田松陰や福井の松平春嶽側近の橋本左内、頼山陽の三男頼三樹三郎、大老井伊直弼を暗殺して刑死した水戸浪士の墓などがある。



橋本左内墓所

その他鼠小僧の墓が、両国回向院だけでなくここにもある。新しいものでは二・二六事件の計画・指揮にあたった磯部浅一などの墓もある。

回向院の入口には、蘭学者杉田玄白らが『ターヘル・アナトミア』の内容を確かめるため刑死者の腑分けに立ち会って『解体新書』に役立てたことを記念して1922年に寄贈された観臓記念碑がある。

山谷通りを西方に少し歩いて国道4号(日光街道)に出て南に行くと円通寺がある。ここには1868(慶応4)年上野寛永寺で大敗した彰義隊の犠牲者の遺骸を火葬して合葬し供養した墓がある。墓の近くには、弾痕も残る寛永寺の黒門も移築されている。

円通寺から国道を少し北上した、先の山谷通りとの交差点には素戔鳴神社がある。「てんのうさま」と呼ばれる神社で、元は牛頭天王神社と呼ばれていたという。この神社の縁起には、795(延暦

14)年荊石が光を放ちその光のなかに姿を現した素戔鳴尊、事代主命の二神を祭神として祀っていると、記されている。

3 千住大橋を渡る

ここを出て少し歩くと隅田川で、芭蕉が『奥の細道』の第一歩を記したところである。千住大橋で隅田川を渡ると、その北詰には橋戸稲荷神社がある。本殿は土蔵造りで、正面の観音開きの左右の扉の内側には伊豆長八(本名入江長八)作の鰻絵が描かれている。今は見る事ができない(千住宿本陣跡の近くにある「千住宿町の駅」で鰻絵の写真を見ることができる)が、向かって右側が雄狐、左側が子狐を抱いた雌狐などが描かれている。これは、荒川と掃部堤に挟まれた低地にあつて絶えず水害に苦しんだ橋戸の農民が豊作を祈願したものといわれている。この近くは明治の官営千住製絨所(後の日本皮革)の工場跡(今はマンション群)で、橋戸町からその北に隣接する緑町は、戦後も水害に苦しんだところである。これらの低地は、地下鉄千代田線を開削したとき、その土を土地のかさ上げに利用したと聞いている。

千住大橋北詰の川下側には、「やっちゃ場」の伝統を継いで東京中央市場千住市場があり、魚類を扱っている。その手前から北に向かって国道を右に離れてゆく少し狭い道が旧日光街道である。市場から少し歩くと掃部堤(現墨堤通り)につくが、この旧道一帯が江戸時代のやっちゃ場跡で、昭和20年代までは野菜や川魚の朝市が開かれ市場として賑わっていた。このやっちゃ場の人びとを氏子とした神社が、国道沿いにある河原町稲荷神社



昭和初期のやっちゃ場風景

(1945(昭和 20)年の空襲で社殿が焼失し、由緒書きなどの資料が焼失したため、やっちゃ場成立以前のことについては不明)である。

旧日光街道と墨堤通りの交差点は、江戸時代高札場があったところで、この近くには一里塚もあった。この交差点の北に接する源長寺は、この地を開拓した石出掃部亮吉胤が 1610(慶長 15)年がに一族の菩提寺として創建した寺で、その境内には、空襲の際被災して枯れた樺が残されている。

4 掃部堤を越えて

掃部堤を越えたところで旧日光街道から左手に分かれて現在の国道を越えて行くのが大師道と呼ばれる、西新井大師に続く道である。この大師道を、国道を超えて少し行くと千住神社がある。由緒書きによると、千住神社は、千住に集落が形成されはじめた 924(延長



空襲を生き残った銀杏

4)年に土地鎮護と五穀豊穰を祈って稻荷神社として創設されたもので、1051(永承6)年源義家が後三年の役での奥州遠征の際、荒川を渡り千住神社の地に陣営し戦勝を祈願したと記録されている。この境内には、1945(昭和 20)年4月の空襲で焼かれながらも今も生き残っている大きな銀杏の木がある。また、境内には当時の防空壕も残されている。

5 千住本宿(一〜五丁目)を歩く

大師道を国道まで戻り、千住警察署からJR常磐線の踏切につづく広い道を少し行くと慈眼寺がある。縁起によれば 1314(成和3)年行覚上人が関東巡錫のときに創建されたという。将軍家光のとき聖観世音菩薩像(弘法大師作と伝わる)を安置し本尊としてのち、将軍が日光東照宮参詣の際の休憩所となり、葵の寺紋を許された。千住宿の間屋

場が近かったことなどから、この寺には千住町消防組織の碑がある。

本堂脇を抜けて旧日光街道につづく慈眼寺の山門を出ると、すぐ左手に不動院がある。この寺は、1333(元弘2)年の創建と伝えられている。千住宿の間屋場や「やっちゃ場」が近かったこともあって、この寺には川魚料理人が魚類の冥福を祈った包丁塚や遊女の無縁塔などがある。また、千住口から戊辰戦争に従軍した芸州藩の軍夫、従軍者のうち千住近在から参加し戦死したものの供養塔もある。この不動院と慈眼寺は、北千住駅前の金蔵寺とともに千住宿で天保の飢饉の際(1837(天保8)年)亡くなった人びとを埋葬したところである。

旧日光街道に戻ってさらに少し北に向かって歩き、左に見える参道の先に赤門寺(勝専寺)がある。千住の地名の由来で触れたように、1260(文応元)年に創建された寺である。江戸時代には、徳川秀忠、家光、家綱などが利用し御殿も造営されたほか、日光門主などが利用した記録もあるという。この寺には、地元では「お閻魔さま」と呼ばれている焰魔堂があり、木造の閻魔大王座像(1789(寛政元)年作)が祀られている。その脇に建つ鐘楼(1891(明治24)年再建)には、朝鮮独立党の指導者金玉均(1884年甲申事変で日本軍の援助で政権を奪取し清朝の勢力を排除しようとした)が、クーデタ失敗後日本亡命中に撰文し、中根半嶺が揮毫した鐘楼再建記念の碑文があり、碑に金玉均の名が見える。

旧日光街道に戻って参道と反対側の狭い路地を進むと、北千住駅の近くに先ほど触れた金蔵寺



左は赤門寺、中央が勝専寺焰魔堂、右に鐘楼、

(1335(建武2)年開基)がある。本尊は閻魔大王で、本堂にある一番古い板碑の年代と一致しているという。この寺は、千住宿の飯盛り女(遊女)たちの投げ込み寺で、寺門を入ってすぐ左手に遊女たちの供養塔と天保大飢饉の死者の供養塔(1840(天保11)年建立)が並んでいる。碑文には天保の飢饉では、1837(天保8)年には当地で823名の犠牲者が出たと記されている。

旧日光街道に戻ってさらに荒川に向かって進み、北千住駅の駅前通りを横切ると、すぐ左手に千住宿本陣跡の石碑が建っている。石碑の横、路地を挟んだ左手のビルの壁には本陣周辺の案内板が掛かっている。この案内板では、「明治天皇行在所跡」の記載がある。旧日光街道を挟んで本陣と反対側の中田屋という宿である。明治維新後盛んに全国巡遊を行った明治天皇は、東北巡遊の際にはここに宿泊して送別の宴を張り、帰りにも一泊していたという。その折り、ここで重要な密奏がされたこともあったという。

荒川に向かってさらに進むと左手に千住本氷川神社(1307(徳治2)年創建)の参道がある。この神社の旧社殿は方一間あまりの木造で、切妻造、屋根は箱棟こけら葺きで勾配が美しく、組物も精緻で、頭貫や虹梁には龍や鳥類の彫刻があることで有名である。

旧日光街道をさらに荒川に向かって歩くと、道の左側に江戸時代中期からつづく絵馬屋・吉田屋がある。当代の絵師は八代目で、地口行灯や凧、絵馬などを手書きで描く、都内ではほとんど見かけない希少な店で、先代からの絵柄とその手法を踏襲している。道の右手には横山家がある。1855(安政2)年に建てられた住宅で、木造二階建て細格子造りが保たれている。現在の建物は1936(昭和11)年に改修されているが、ほぼ建築当初の姿を保って、現在も使用されている。横山家は地漉き紙問屋を営んでいた旧家で、江戸時代には、公用の旅行者に対する便宜を図って課役(伝馬役)を負担したことから、伝馬屋敷とも呼ばれていた。1868(慶応4)年、上野彰義隊が官軍との戦いで敗走した際に付けたとされる、刀の跡が玄

関の柱に今も残されている。しかし、現在も住居として使用されているので、当然、見ることはできない。

横山家の手前の路地を進むと、長円寺がある。足立区教育委員会掲示の縁起によれば1627(寛永4)年出羽湯殿山の行者雲海が、ここに庵を結んだことにはじまり、後に、賢俊が開山したという。九代将軍家重の延享年間(1746~47年ころ)にことに栄えた寺である。この寺にある魚藍観音・目やみ地藏・宝篋印塔・乳泉石などは、民俗信仰をみる上の貴重なものである。

先の横山家からさらに荒川に向かって進むと、檜かけ団子の店があり、さらに進むと日光街道と水戸街道の分かれ道で、道ばたには道案内の石柱が立っている。このまま日光街道を進むと、江戸時代からつづく骨接ぎで有名な名倉(今は病院)の長屋門がある。

名倉の前を戻って水戸街道に入って進み、JR常磐線の高架線路をくぐって行くと、東武伊勢崎線の線路近くに清涼寺(1619(元和5)年創建)がある。本堂は江戸後期(1833(天保4)年)に建造されたもので、山門は1931(昭和6)年に改修されたものが残っている。この寺は、かつては水戸街道に面して松が茂り「檜掛け松」の名が生まれた寺である。この墓域には1870(明治3)年日本の医学の黎明期に刑死人11名を解剖し、それを供養した解剖人塚がある。



村から長州戦争に出征した「兵賦」

名主日記に読む幕末の世相

重政文三郎

江戸時代は武士の時代であり、「兵農分離」の原則があって、武器を持つことは武士の特権であった。したがって庶民が戦争に出かけることはなかった。ところが幕末の政治情勢の中で、一般庶民が税として戦争に駆り出されることが始まった。きっかけは異国船の来航以後、「攘夷」の実行が激しく論じられるようになったことであろう。そのために対外的な「海防」のための軍勢力と、激化する攘夷派に武力で対抗するための軍勢力の強化が急がれた。

「兵賦」とは何か

文久の軍制改革により幕府は、従来の大名や旗本に求める兵力提供を拡大する、全く新しい策を打ち出した。それが「兵賦」である。文字のとおり読めば「税として賦課される兵力」である。兵賦令によれば、旗本はその知行高に応じて、知行地である村から農民を、知行高五百石につき一人、千石につき三人というように人数が決められ、十七歳から四十五歳迄の「丈高く強壯の者」を五ヶ年季で兵賦として取り立て、幕府陸軍の歩兵に組み込むこととなった。

江戸へ集められた兵賦たちは、西ノ丸下・大手前・小川町・三番町に設置された歩兵屯所へ入れられ、鉄砲隊として近代的な軍事訓練を受けた。兵賦への給金は年十両以下を主人である旗本から支給されることとしているが、実態は村からの旗本に対する上納金で賄われた。

旗本山口氏はその知行地である小野路・野津田両村（現・町田市）から1～2名の兵賦を取り立て、その給金についても村に上納金として差し出させていた。それによって歩兵となって出て行ったのが野津田村の清十郎であり、彼が出奔したあと小野路村の綱五郎が歩兵となっていた。彼らは天狗党の乱と長州戦争という二つの戦いに駆り出

されたのである。

長州戦争で戦った兵賦

町田市小野路町の小島家に残る名主の『日記』では、このような兵賦の取り立てられる様子が、村の立場から記述されており興味深いのであるが、ここでは慶応2年の長州戦争へ幕府側から出征して戦死した小野路村の農民のことを報告したい。

日記では関連する記事が2つ確認できた。一つは小島鹿之助がその漢学の門人である小川市太郎から聞いた話として、市太郎の叔父浪五郎が芸州大野村で八月七日に戦死したことを聞いた（『日記』慶応2年12月30日）という記述である。もう一つの記事は、鹿之助の父・角左衛門の遺した日記『梧山堂雑書』で、別所庄左衛門倅の仙蔵が隣村の地頭駒井様の歩兵として長州征伐に出征して大野村で討ち死した（『雑書』慶応3年4月8日）という記事である。現在、小野路村別所にお住いの小川康夫氏宅で、たまたま小島政孝さんがこの話をしたところ、小川氏宅にそのお位牌があることがわかった。しかもお位牌の文字から、『日記』の浪五郎は『雑書』の仙蔵と同一人物であることも確認され、「ご先祖が幕府の鉄砲隊に入って活躍したと聞いている」とのお話を康夫氏から聞くことができた。

＊＊

『日記』慶応2年12月30日の記事は、

「小川浪五郎 寅五十二才（四十一ヶシ）
芸州大野村にて当八月七日戦死為当座御手当
公辺より七両被下駒井様より五両被下追て沙汰可有之由也
戦死 七両 深疵 五両 薄手 三両
上称諡 忠誉義岳信士
十二月卅日 門人小川市太郎より承り記也、
同人ノ叔父也」

と書かれ、次に『雑書』は、翌年の慶応3年4月8日の記事として、

「別處庄左衛門忤仙蔵与申者、黒川駒井様歩兵二罷出、昨年中長門征伐二登り藝州大野村二而打死、当座御手当として金拾七両被下置芝増上寺埋り候処、此度御呼出二而金百両被下置候由二而駒井様御沙汰に而明日出府与申来候、先珍事控置申候」

とある。さらに、小川家のお位牌の文字は次のようになっている。

表	「忠譽義學明光信士位」
裏	「俗名 歩兵浪伍良仙蔵 徳川幕府征長軍二従ヒ 藝州大野二於テ戦死 時千 慶応貳年八月七日」



これらの史料を突き合わせてみて、まず浪五郎と仙蔵は同一人物であることがわかった。彼は隣村の都築郡黒川村の領主・駒井様の兵賦として出征した。駒井様とは『旧高旧領取調帳』によれば旗本・駒井孝三郎であるが、駒井甲斐守朝温という旗本ではないかと思われる。駒井甲斐守は当時陸軍歩兵奉行から陸軍奉行並になっており、長州戦争にも関係していたかもしれない。

芸州大野村は現在の広島県大野浦のあたり、長州戦争で幕府が長州に攻め込んだ四方面の一つ「芸州口」の戦場となった村である。芸州口の戦いは、慶応2年6月、まず幕府方は彦根藩が先鋒した。鎧兜の美しい「井伊の赤備え」で着飾った彦根藩兵であったが、戦意は乏しく早々に退却した。そのあと、紀州藩と幕府歩兵隊が進軍して長州軍の鉄砲隊と激戦を展開した。野口武彦氏は『幕府歩兵隊』(岩波新書)の中で、芸州口の戦いでの歩兵の戦いぶりを次のように描いている。

「八月二日、西丸下歩兵隊が海岸通りを、三番町歩兵隊・水野大炊頭隊が山間の道を玖波に進撃し、叱咤の励声山壑も顔れ激弾鳴丸坤軸も崩る



「海陸軍戦死之墓」(安蓮社墓地)

(慶応二年八月七日)
同年同月同日
忠譽善順信士
(芸州佐伯郡大野村)
同郡同村戦死
駒井甲斐守兵賦
波五郎
歳三十

ばかり震動」(昭徳院殿御在坂日次記) という激戦を展開……」 「八月七日、大きな台風が山陽から近畿にかけての地域を襲っていた。これに紛れて大野に反攻してきた長州勢は猛烈に攻め立てたが、幕府兵も風雨の中をよく守った。とりわけ歩兵隊は……敵ながら天晴れと認められるまでに戦ったのであった」

浪五郎の大野村での戦死は、まさにその8月7日であった。小島日記によれば、この浪五郎の戦死に対して、幕府から七両、駒井様から五両の見舞金、また、当座のお手当金七十両下され芝増上寺に埋葬されたことが記されている。

芝増上寺に葬られる

芝増上寺に葬られていることがわかり、小島政孝さんとごいっしょに墓を探しに行った。増上寺の塔頭・安蓮社の墓地に「海陸軍戦死之墓」がある。この墓碑の側面に「歩兵指図役・友成求馬」はじめ12名の名前があった。長州征伐の戦いで戦死した幕府軍士官である。裏面には勝海舟の弔辞文が刻まれている。

そして石碑の台座に目を落とし身をかがめて文字を探すと、そこに36名の戦没兵士の名前が列記されているのがわかった。その中に「波五郎」の文字を見つけることができた。

「慶応二年八月七日芸州佐伯郡大野村戦死」とあり、戒名「忠譽善順信士」の下に「駒井甲斐守

兵賦 波五郎 歳三十」と刻まれていた。

戒名は小川家のお位牌の戒名と少し違っている。年齢も日記に書かれた年齢52歳、ただし訂正して41に読めるが、この碑では30歳になっている。しかし、旗本の駒井甲斐守の兵賦として取り立てられ芸州大野村で戦死したことがしっかりと読み取れたのである。

文字を丹念に読んでいくと、墓碑下部の台座に書かれた歩兵クラス36名のほとんどが、読みとれた中で少なくとも25人以上が旗本の兵賦であった。しかも浪五郎と同じ大野村など芸州口での戦死が一番多く、ここでの戦闘がいかに激しいものであったかが裏付けられるものである。

長州戦争の初めに幕府軍が攻撃し一時占領したのが周防大島であったが、その久賀庄で戦死した兵賦の名前が数名みられた。長州歩兵隊が大島を奪還すべく激しい戦闘になったことによる。また、小倉口では軍艦上大砲破裂などでの戦死が2・3名みられたが、戒名も違っているので兵賦ではなさそうであった。

年齢を見ると、20歳から最長46歳であるが二十代が大多数であった。そこに、幕府歩兵隊の構成、兵賦として出征した農民の実態がわかるのであった。

『藤岡屋日記』によれば慶応2年11月25日に増上寺で葬儀、幕府陸軍隊など1万余が参列し、300名の僧侶の読経があったという。徳川幕府最後となった盛大な葬儀がおこなわれ、記念碑が建てられたのであった。しかし幕府軍は負けて賊軍となり、「兵賦」の戦没者は、靖国神社に葬られることはなかった。

会員の訃報

池口康夫さん

会員の池口康夫さんが10月12日にお亡くなりになりました。池口さんは白血病が回復に向かっていましたが、肺炎を併発し、亡くなられました。67歳でした。池口さんは上野高校校長ご退職後、全高P連事務局に勤務されました。ご冥福をお祈りいたします。

友の会 第13回総会の報告

東京都歴史教育研究会友の会の第13回総会を、6月20日(土)都立杉並高校にて開催しました。

総会議事は次の通りです。

(1) 事業報告

- ①「友の会だより」12号の発行、
 - ②ミニ歴史散策「たばこと塩の博物館」
 - ③会員による学習会「近世文書講読会」の開催、
 - ④友の会研修旅行「佐原・香取」
 - ⑤友の会学習会「国分寺跡を巡る」、歴史散策「武蔵国分寺跡」を実施、
- 等の友の会独自企画の実施が報告されました。

(2) 決算報告

矢島恒之会計担当から、会費納入46名のほか、寄付をいただいた方4名があったことが報告されました。決算報告、監査報告が了承されました。

(3) 世話人選出

今年度の世話人は、引き続き次の11名を了承。
小澤拓美 木村清治 黒田比佐雄 鍵山充尚 重政文三郎 竹内秀一 多田統一 豊田岩男 増田克彦 村木逸子 矢島恒之

(4) 事業計画

今年度は友の会独自企画として国内の研修旅行「『富士の恵み』を訪ねて」を実施します。その他、ミニ研修や学習会を企画します。

(5) 友の会の今後について

退職年齢の高齢化、会員数62名を頭打ちに減少、役員の後継者不足、都歴研への都の助成金があり本会からの支援が無用となったこと、などの状況から、今年度の活動をもって本会を解散することを決議しました。詳細は別掲「議案第5号」。

(6) 2019年度予算

本年度会費は徴収しない、本会主催の研修旅行への助成を増額、前納された会費は返還する、それらをふまえた予算案が提案され了承されました。

友の会だよりへ投稿のお願い

本紙最終号は、来年7月中に発行します。以下の要領で会員の皆様の原稿をお待ちしています。

内 容：研究要旨、資料紹介、書評、紀行文等何でも。

字 数：2000字～3000字

著作を刊行された場合には書籍そのもの、または要旨をお送り下さい。紙上でご紹介します。

送付先：〒191-0033 日野市百草971-158 増田方

東京都歴史教育研究会友の会事務局

原稿はメールでお送りいただくと助かります。

送付先は別途ご案内しますのでご連絡ください。

友の会の今後について

東京都歴史教育研究会友の会（退職者の会）は 2020 年 6 月の第 14 回総会をもって解散する。

本総会で解散を議事とするに至った「友の会」発足以来の経緯と現状は次の通りである。

1 2007 年 6 月に発足した本会は、本年 2019 年を以て発足以来 12 年の歳月が経過した。

2 本会は、退職者、特に「顧問」に対する都歴研事務局の負担軽減、都歴研への経済的援助、退職者間の親睦を図ることの三点を目的として発足した。

3 発足時、会員数 44 であった本会は、2013 年 6 月の 62 名をピークに、新しく入会される方よりも鬼籍に入られる方や体調を崩されて退会される方の方が多いことから、2019 年 6 月現在の会員数は 51 となっている。なお、世話人 11 名中 7 名は発足当時からの世話人メンバーである。

4 本会は発足以来、都歴研の年次総会が開催される会場校の一室をお借りして総会を開き、年一回、毎年 7 月、B5 判 20 ページ前後の「友の会だより」を発行、年 1 回の泊を伴う海外旅行と国内旅行とを隔年で企画、その他、学習会やミニ歴史散策を開催するなど、また、都歴研事務局から情報を得ては、都歴研が開催する年 2 回の講演会と年 3 回の史跡見学会、全歴研都歴研共催による夏の海外研修、夏の全歴研大会・秋の関歴研大会等のご案内を会員にお送りするなど、年 4 回の世話人会を軸に多彩な活動を展開してきたと言える。

5 結果、設立趣旨の一つ、退職者に対する都歴研事務局の負担軽減については、ほぼ完璧に行われた。とはいえ、都歴研の諸行事についての情報を得る過程で、東京都教育委員会の推し進める「改革」の中でご苦勞を重ねられている事務局、特に会長・副会長の任に当たっている先生方には、心ならずも余分な心理的・事務的ご負担をおかけしてしまっていた。この、心ならずも負担をかけてしまっていたこともまた今回解散を決するに至った要因として大きなものがある。

6 設立趣旨の第二、都歴研への経済的援助については、2007 年度から 13 年度までの 7 年間、毎年、都歴研に対して 5 万円を、計 35 万円を贈呈してきた。12 年度以降 04 年度まで行われていた都教委からの「補助金」約 30 万円が復活したことを受け、14 年度以降はこれを全歴研大会での分科会発表者に「歴史教育研究助成金」として、一人当たり 5,000 円分の図書券を贈呈することとし、15 年度 12 名、16 年度 2 名、17 年度 10 名の計 24 名、12 万円を贈呈してきた。このことから都歴研に対する経済的援助についても一定の成果はあったと考えている。

7 設立趣旨の第三、退職者間の親睦を図るについては、まず、毎年総会後親睦会を開催した。しかし総会出席者は、特筆すべきものとして、創立総会の 14 名、2018 年度の第 12 回総会の 11 名があるのみで決して多くはなく、総会後の親睦会は十分なものはなかった。しかし、年 1 回の泊を伴う旅行については、2008 年度の中部イタリア、09 年度の白石・米沢、10 年度の南イタリア・シチリア島、11 年度の平泉・奥六郡、12 年度の中央ヨーロッパ 4 ヶ国、13 年度の日光、14 年度のスペイン、15 年度の京都・湖北旅行と、海外・国内を隔年で実施したが、これには毎回十数名から二十名の参加者を得、相応の成果があったと考えている。ただし、この泊を伴う旅行については、世話人の高齢化からくるエネルギーの枯渇によりその企画実施が困難となったことから、2015 年度を最後に中止、16 年度は鎌倉、17 年度は行田・深谷、18 年度は佐原と日帰りの旅行とした。また、泊を伴う旅行を中止したこともかわり、17 年度以降半日のミニ歴

史散策や学習会を開催した。これらは年 1 回の B5 判 20 ページ前後からなる「友の会だより」の発行と共に会員間の親睦と情報交換に資するところが大きかったと考えている。

8 都歴研が開催する諸行事への会員の参加については、特に、2007 年度から 09 年度までの春季・秋季の史跡見学会には常に 10 名を超える参加があり、都歴研の行事そのものに対しても相応に寄与するところがあった。が、10 年度以降は減少の一途をたどり、以後 10 名を超えることはなくなった。講演会への参加も減少、会員の参加はなしと言う情景もしばしば見られるようになっている。全歴研大会への参加も、東京大会では 10 名を超えたが、他県開催の場合にはは極めて少数か 0 という状況である。

9 発足以来今日まで、新会員獲得と世話人の若返りの努力とを一貫して続けてはきたものの、思うに任せず現在に至った。

10 新会員の減少と結果としての会員数の減少、そして世話人の交代が困難になった状況については、他の退職者の会あるいは地域老人会に共通するものではあるものの、そして根底には特定の組織に属することを厭う感覚を持つ者が少なくない現状にあるとは言え、次のような事情が考えられよう。60 歳定年退職後、年金受給年齢との関係から 65 歳までは退職者のほぼ全員がフルタイムで働くこととなり、定年退職年齢は事実上 65 歳となった。しかし、年金が減額されつつあることや寿命の延伸等からくる老後の不安、それ以上に生きがいを求めて 70 歳まで、あるいはそれを超えて、パートタイムで、あるいはフルタイムで働く者が激増した。そして、退職者のそれぞれの職場における立場や役割は、十数年ほど前までのような補助的なものから相応に重要なものとなってきており、結果、「友の会」のような活動にそのエネルギーを割くことが困難になっているとも思われる。退職後、新たな生きがいを見出し、それに邁進している者が多いであろうことは言うまでもない。

11 前述のような、会員数の減少、会員の高齢化と行事への参加者の減少、世話人の高齢化とエネルギーの枯渇、そして心ならずも事務局、特に会長・副会長の任に当たっている先生方に余分な心理的・事務的ご負担をおかけしてしまっていたことなど、「友の会」と「友の会」を取り巻く状況等を勘案すると、今後、従前同様の「友の会」の活動を継続することは困難であるとの判断を下さざるを得ない。都歴研の歴史 70 余年の間には時としてあった一時的な低迷や混乱が今後もありうる。あるいはまた都歴研が直面している状況などを考慮すると、将来における「友の会」のような「退職者の会」の復活を念じつつ、ここで「友の会」は解散することが、却って禍根を残さずに済むのではないかと考えるに至った。

解散までの手続きと解散に向けての作業

1 本日、第 13 回総会で、「友の会」は 2020 年 6 月をもって解散することを確認する。

2 2019 年度の「友の会」の活動はほぼ従前通りの計画にもとづき行うが、2019 年 7 月発行の「友の会だより」13 号に、「友の会」は解散し 2020 年 6 月の第 14 回総会が解散総会となること、19 年度の会費は徴収せず、19 年度以降の会費を前納している方には相当する金額をお返しすること、また最終的な残金は都歴研に寄付することを明記する。

3 2020 年 7 月発行予定の「友の会だより」14 号は「解散記念号」とし、従来同様の記事に加え、多くの会員から「都歴研の思いで」「歴史教育実践の思いで」などあるいはアンケート形式での玉稿を頂戴して編集する。なお、「友の会だより」の創刊号から 14 号までを合本とし、国会図書館、都立中央図書館等に対し納本手続きを取る。

4 今後、「友の会」は純粹かつ単純な「退職者の会」となり、年に一・二回の歴史散策と親睦会を開催する。

都歴研友の会ホームページ

<http://rekishitomonokai/sakura.ne.jp/>